

シユムペーター・モデルの再検討(上)

——開発理論形成のための適応論争をめぐる——

浜崎 正規

- 一 はしがき
- 二 H・C・ウォリッチ氏の誘導発展理論
—シユムペーター・モデルをめぐる問題提起—
- 三 D・リムマー氏のウォリッチ氏批判
—シユムペーター・モデル評価をめぐる問題視角—
- 四 争点—その(I)—
—シユムペーター体系に位置する「政府」をめぐる—
- 五 争点—その(II)—
—シユムペーター体系の基底にある発展「動機」をめぐる—
- 六 争点—その(III)—
—シユムペーター体系の「革新」概念の解釈をめぐる—
- 七 結び
—論争検討の一階梯として—

一 はしがき

フレドリック・フレイブシヒ（Friebisch）教授が『経済成長の理論的実践的諸問題』（“Theoretical and Practical Problems of Economic Growth”, United Nations Economic Commission for Latin America, 1950）の序文でいうように、有効な開発政策が樹立されるためには、その後、それ固有の理論が、位置づけられていなければならない。今日、いわゆる先進国の経験にもとづいた有効な多くの理論は存する。しかしながら、それらの諸理論は、開発途上にある低開発国にとって、そもそもつぎのような根本的欠陥が横たわっている。すなわち、まず第一に基本的な問題視角のちがいである。いうまでもなく、理論は本源的に、客観的性格をになっていなければならない。とすれば、低開発国の開発問題を課題としてせまる経済理論家には、低開発国自体のもつ問題視角で、自己自身を律する姿勢が何よりも要請される。その姿勢が欠如したところに、真に実り豊かな思考を期待するということが、いかに困難であるかは、論をまたない。たとえば、通貨の安定性を問題とし、また自由貿易について、きわめて教科書的視角から思考をめぐらすことに終始する理論家は、低開発国が、なにゆえ発展することができないのか。とりわけ工業化することができないのか。ないしは工業化することができなかったのか、といった問題提起をめぐって、種々様々な障害物を列挙し、その理由を明らかにすることはできるであろう。およそこうした種類の消極的な理論化は、それなりに関心がもたれるところでもある。しかしながら、低開発国が内在しておる問題解決に対して、それがさほど役立つものとは考えられない。まさに今日、そこにおいて要求される積極的理論の、目途とするものが、低開発国をめぐって、そこに存する障害物、ならびに困難性を発見するにとどまることなく、そ

れらるば、除去し解決する手段・方法を見いだすものでなければならぬ。

ところで、いままでのところ、先進国における経済の発展問題をめぐる理論化の作業に、二つの型の接近方法が存したといえるであろう。一つは、経済の発展局面に関連して生じてきている学説の体系がそれである。これを発展局面型接近と呼んでおこう。この型は、発展局面における人口問題に関しては、人口理論が形成され、それとして、資本形成については、貯蓄と投資の理論が形成されるというように、まさに発展局面に呼応して、それぞれ理論の擁立化が試みられ、分析道具が形づくられるという接近方法である。このような方法にもとづく分析道具が、それなりに問題状況解明の分析理論として、十分利用にたえうるものであることは否定しえない。それにして、そこには、理論間の有機的統一が存しない点を指摘せざるをえない。しかもその事が、結果的には、発展局面型接近法をもってしては、人々を十分満足させえないものに終わってしまうおそれがあることを否定しえない。以上のような接近方法にとって代わろうとするものとして、単一的、統一的、発展理論型とも呼ぶことができる接近方法を挙げるのできるのである。すなわち、この方法は、いくつかの基本的前提に立脚し、広範囲にわたる経済領域を包含する結論へと進行する接近方法であって、そこには、理論の内的統一が試みられているという点である。本稿で論議を展開する J・A・シュムペーター (Joseph Alois Schumpeter, 1883—1950) の経済過程をめぐる分析方法は、まさしくこの型に属する典型的なものといえる。P・S・ローマス教授 (Prem Singh Laumas) が「シュムペーター理論は、経済発展の過程を、体系的に説明することをねらった数すくない理論の一つである」と明言してきたことがここで想起される。

さて、私は、いわゆる先進国において、経済発展の問題に対処した既存の接近方法を、二つに類型化して把握

してきた。それにしても、そうした類型化は、あくまでも先進国自体の経済発展をめぐる経験を通じてのものであったことを、指摘しておく必要がある。以上の認識をふんまえて、低開発国自体が内在する問題状況に、研究者自体が、自己をいかに律するかという基本的姿勢をベースにすえて、いわゆる積極的理論をどのように構築してゆくかという点に、今日の低開発国をめぐる経済開発論の焦点はしぼられるといえよう。

ところで、今日、いわゆる「南北問題」が世界的関心の中心にすえられつつある。かつてのジュネーブにおける第一回国連貿易開発会議（UNCTAD）が、先進国側に対する「南」のつきあげによって、いわゆる「北」側に對して低開発諸国が直面している問題状況の一応の認識と責務感を深めさせることに成功したものの、昨今、先進国側の当面する様々な問題と、低開発国援助の効果に対する懷疑主義によって、「南北問題」の世界的関心の度合いがやや低下しているように思える。そのような世界環境のもとで、一九六八年二月、ニューデリーにおいて開かれた第二回国連貿易開発会議は、低開発国側が主体的な「新しい開発戦略をもとめて」（『新プレビッシュ報告』より）志向し、模索する会議に終わったといっても過言ではなからう。端的にいえば、低開発諸国は、問題の所在を確認しあうことよって、自国の力に相応した経済開発を試みる態度を明確にしたことである。こうした趨勢は、一九六八年五月二十日から東京で開かれた『アジア開発シンポジウム』のなかにおいても確認できた。たとえばロンドン大学教授フラ・ミント氏（Hla Myint）が東南アジアの中小企業の開発に関して、技術と貿易の面で、日本の明治維新後の経験が、きわめて有効だと指摘した点に、端的にそのことをうかがうことができたのである。それにしても、低開発国が自国の力で経済開発の糸口をみいだす作業は、問題の多面性ゆえに、きわめて困難事である。しかしながら、率直にいえることは、世界史的現実の環境のもとで、低開発国の経済開

発をとりあげる視角が、ただ単なる体制選択論ではなく、それぞれの国の社会的・経済的・自然的条件の相違を前提として、最良の経済計画を作成すべきであるという点である。体制論を主題として論ずることよりも、計画の実践性のある論議がより重要である。しかも問題は、だれがどのようにして、国富の蓄積をすすめるか、といきわめて具体的に、しかも実行可能なプランニングの作成にあるといわなければならない。

ここにおいて、経済開発の主体は誰か、という基本的にして、しかも現実的な問題が提起するのである。いわば、いかに開発をすすめるかという難問も、実のところ答えとしては、低開発諸国それぞれの実体を明らかにした上で、開発主体を何にみいだし、そうして、その開発主体を経済社会の発展過程にかかわってどのように理論的に組成するかという点にしばられるのではあるまいか。その意味からも、かつて、いちはやくR・ヌルクセ氏(Ragnar Nurkse)が、低開発国の経済開発についての理論的研究に関して、「シュムペーターの理論は、われわれがまさに使用しなければならぬ雛型を提供するようにみえる。但しわれわれは、若干異なった要素をもってそれを用いるであろう」と、主張してきた点が今日、再認識されるべきであろう。すなわち、J・A・シュムペーターの『経済発展の理論』(Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, 1912)における「企業者」(Unternehmer, entrepreneur)概念に研究者の関心を喚起しつつ、低開発国の経済開発論の理論形成にあたって、シュムペーター理論の再検討、再評価を暗示したのであった。ところが一般的な大勢としては、D・リムマー氏もいうように、シュムペーターの経済発展に関する労作『経済発展の理論』が、一九五〇年代の前半頃まで、低開発国の開発問題にかかわって積極的に再検討・再評価が試みられるということは、皆無に等しい有様であった。そういった傾向のなかで、H・C・ウォリッチ氏(Henry C. Wallich)が一九五二年『誘導発展の理論をめぐる若干の覚書』⁽⁶⁾

(“Some Notes Towards A Theory of Derived Development”)を公にし、シウムペーターの発展理論を点検しつつ、しかもこれを対照化しながら自己の誘導発展の理論を構築し、これをもって低開発国問題に対応する意図をしてみたのであった。——すなわち、シウムペーターの理論モデルを、現実の低開発国問題に対置させて再検討を試み、そこからなごしか開発理論への示唆を導きだし、彼特有の用語法による誘導発展の理論を主張したのである。そのかぎりでは、ウオリッチ氏によつてはじめて、シウムペーター理論は低開発国の開発問題の地平にかかわつて、その評価が肯定的であれ否定的であれ、理論水準の関心事となつたということができよう。その後、ウオリッチ氏のシウムペーターモデルに対する評価をめぐつて、ならびに彼の積極的所論に対して、論者は賛否両論、論議を展開してきたのである。すなわち、H・W・シンガー氏⁽⁷⁾(H. W. Singer)、A・ボンネ氏⁽⁸⁾(Alfred Bonne)、H・G・オーブレイ氏⁽⁹⁾(Henry G. Aubrey)、D・リムマー氏⁽¹⁰⁾(Douglas Rimmer)、P・S・ローマス氏⁽¹¹⁾(Prem Singh Laumas)等がこの論争への参加者である。

さて、私がさきに指摘したように、現実の低開発諸国が理論的に追求しなければならない課題は、まずそれぞれの国の実体を明かにした上で、開発主体を何にみだし、その開発主体を経済社会の発展過程にかかわつてどのように理論的に組成するかという点である。そうした問題意識からすれば、たとえ先進国の経験をベースとしたものであれ、シウムペーターモデルをめぐる吟味・検証という作業が右の課題との関連において余儀なく要請されてくるということを肯定しなければなるまい。

そこで本稿のねらいは、一連の論争を通じて、今日シウムペーター理論がどのように再検討の俎上にあるかを明らかにすることにある。そのために、まず最初に、ウオリッチ氏がシウムペーター理論を実践的問題状況との

対応において、いかにとらえているかを考察し、そうして彼自身が積極的に構築する誘導発展の理論が、どのような内容のものであるかを明らかにする。(第二章) つぎに第三章において、ウォリッチ氏の所論をめぐる反論、とりわけリムマー氏の場合をとらえてみる。ここにおいて私はリムマー氏の基本的問題視角を中心にとりあげる。第四章から第六章にかけて、ウォリッチ氏、シンガー氏、ボンネ氏等とリムマー氏との争点を浮彫りさせ、そうした争点が生ずる根拠を探ってみる。そうして本稿の一応の結びとして整理を試みる。(第七章) 次稿においてシユムペーターモデルに対する以上のような両極分解的評価をふまえてP・S・ローマス氏がいかに個性的論陣をはってきているかを考察してみることとする。

(1) Prem Singh Laumas; Schumpeter's Theory of Economic Development and Underdeveloped Countries, Quarterly Journal of Economics Vol. LXXVI No. 2, Nov. 1962, p. 653.

(2) ミント教授は、日本の例をひいて、明治維新後の約三〇年間、日本は五割という低い関税にしばられたいわば「強制された自由貿易」の中で国内産業を育成してきた。ところが一般のアジア諸国では、関税障壁をいたずらに高くして、貿易の拡大よりも国内産業保護という内向的姿勢をとっている。これが多くの点で経済の累積的發展を阻害し、アジアの地域協力を妨げている原因だと説いている。教授はまた「The Economics of the Developing Countries」, 1964の改訂版(一九六七年)にもとづく日本語版『低開発国の経済学』結城司郎次、木村修三共訳昭和四三年八月、鹿島研究所出版会刊)の序文(「日本語改訂版への序文」)において、「日本の経験がそのまま機械的に他のアジア諸国に適用できると考えるべきではあるまい。だが、慎重な調査と想像力とをもってすれば、急速な経済発展における日本の経験のいくつかの側面を選択し、それらを他のアジア諸国に活用することは可能であろう。」「このような慎重かつ実地的なアプローチは、経済発展に関するこれまでの多くの思考よりも実り多いことであろう。これまでの思考は、あまりにも一般的であり、また資本主義、共産主義双方を含む西欧諸国の歴史的見方によってあまりにも影響を受けていた。とくに私は小規模農業の生産性を引き上げ、また小規模産業をもって大規模産業を補完させてきた日本の経験が、他のアジア諸国に対して非常に貴重な教訓を与えるものと信ずる」とのべている。(傍点は浜崎) こうしたミント教授の説に接して、私はつぎの事を指摘しておきたい。すなわち一国の経済を類型的な把握に

よって、他国の実践の場に應用していくことの危険はいままでの低開発国の態度の中にもいくつかみられた。(ミント教授は、それ故に「慎重な調査と想像力とをもってすれば」と、あえてことわっているであろうが)。また学問的にも、現在の低開発国の経済自立の動きを、わが国の明治維新とつき合わせて研究すること自体、必ずしも容許されてはいないのではないか。(そのことを、ミント教授は百も承知であって右のように主張していると考えられる。それ故に「これまでの思考は、あまりにも一般的であり、また資本主義、共産主義双方を含む西欧諸国の歴史の見方によってあまりにも影響を受けていた」と指摘するのであろう)。ともかく、ミント教授の主張するように、低開発国に対する歴史の見方を正しくすることが今日何よりも重要なことであるという点には賛意を表明せざるをえない。

- (3) Ragnar Nurkse: "Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries", Oxford, Blackwell, 1953 p. 11
 (後進諸国の資本形成) 土屋六郎訳(松堂一九頁) マルクセ氏は、第一章第三節「発展の理論と均衡のとれた成長」という概念)においてつぎのようにいう、「周知のシュムペーターの理論によれば、西欧資本主義の発達においては、急速な成長が個々の企業家の行動により、産業進歩の循環的な波動を生みながら達成されたのである。シュムペーターの『経済発展の理論』は先進工業国の経済学者からは一般に景気循環の理論として取り扱われてきた。先進国では経済発展を自分自身で面倒をみる自然過程に似たようなものとして当然の事と認め、経済の短期変動に注意を集中しようとする傾向があった。シュムペーターの労作を正当に解釈すれば、まさにその表題が示すもの、すなわち、経済発展の理論にはかならない。景気循環はその理論の中では、経済的進歩が起る形態としてのみ現われている」と。(傍点は浜崎)

- (4) それにしてもマルクセ氏が、シュムペーターの経済発展の理論そのものの適用問題にふれてつぎのように明言している点を看過してはならない。すなわち「シュムペーターの経済発展の理論は、基本的には、西欧資本主義の発生と成長とに適用される傾向があった。それは必ずしも同じ方法で、他のタイプの社会に適用できるものではない。他の形態の社会では、経済的停滞のもつ支配力を打破すべき諸力が、ともかく最初の中はある程度計画的に組織されなければならないであろう。たとえば日本の初期の産業発展にあつては、国家が偉大な革新者であり、かつ広範囲にわたって産業の先駆者であつた」と。(Ibid. p. 15 邦訳書二三頁)

- (5) Dauglas Rimmer: Schumpeter and the Underdeveloped Countries, Quarterly Journal of Economics, Vol. LXV, No. 3, 1961 p. 422
 リムマー氏は、そのような傾向の典型的なものとして W. A. リウイスの『経済成長の理論』(W. A. Lewis: The Theory

of Economic Growth, London: Allen and Unwin, 1955) を著してゐることは既に述べた。「彼はシュムペーターの『経済発展の理論』はそのタイトルが意味してゐるものよりも、その範圍におこつて、きつめて狭いものであるとどう見解を立て、低開発国の経済開発にかかわつてシュムペーターの労作を検討するに當つては、せめて『資本主義・社会主義・民主主義』を参照するべきである」云。

- (9) Henry C. Wallich: "Some Notes Towards A Theory of Derived Development", (一九五二年、ハンナで開催された第三回 Central Bank Technicians of the American Continent に提示された論稿) の論稿は、その後 "The Economics of Underdevelopment", Oxford University Press, 1958 a series of Articles and Papers selected and edited, by A. N. Agarwala and S. P. Singh に収録されてゐる。私は本稿作成のため、この収録されたウオリッチ論文を参照した。
- (10) H. W. Singer: Obstacles to Economic Development, Social Research, XX (1953) pp. 19—31
- (11) Alfred Bonné; Towards a Theory of Implanted Development in Underdeveloped Countries, Kyklos, LX (1956), pp. 1—24
- (12) Henry G. Aubrey; Investment Decisions in Underdeveloped Countries, in Capital Formation and Economic Growth, A Conference of the Universities-National Bureau Committee for Economic Research, Princeton University Press, 1955
- (13) Douglas Rimmer; Schumpeter and Underdeveloped Countries, Quarterly Journal of Economics, LXXXV Aug. 1961, pp. 422—450
- (14) Pren Singh Laumas; Schumpeter's Theory of Economic Development and Underdeveloped Countries, Quarterly Journal of Economics, Vol. LXXXVI No. 2 Nov. 1962 pp. 653—659

二 H・C・ウオリッチ氏の誘導発展理論

——シュムペーター・モデルをめぐる問題提起——

ウオリッチ氏の理論上の出発点は、シュムペーターの発展理論に対する評価にある。彼のその評価内容を、端

的に一語でいうならば、シュムペーターの学説は、今日の低開発国に適應しない、ということにつきる。では、こうした評価をどのような論証過程によって導き出すのであろうか。問題の焦点の一つがここにある。ウオリッチ氏は、つぎのようにいう。⁽¹⁾シュムペーター・モデルにおける創造力は、企業者によって準備される。その過程が革新である。ところがその革新の目標は、企業者のための富や力の樹立である。もし私達がそれらの概念に対して、一般的なラベルを付すとしたら、つぎのようにいうはずである。すなわち、それらの概念は、すべて生産と消費の領域に属していると。そうして、一般の生活水準は、その結果であるように思われるけれども、けつしてその目標ではないのである。かくして消費と需要の要因は、二次的役割を演じるのである。このように考えられるシュムペーターの發展理論が、直ちに低開発国のケースを満足させるものでないことは明白である。それに対して、低開発国においては、企業者が主要な推進力ではなく、したがって革新がそこにおける特徴的な過程ではないのである。なぜならば、私的な豊さが、支配的目標ではなく「より高い生活水準ということが特徴的な目標であるように思える」⁽²⁾からである。以上がおおよそ、冒頭でのべたシュムペーターの發展理論に対する評価を導くにあつてのウオリッチ氏の中心的な論証である。

ところで、かつて私は、シュムペーターのいう企業者が、革新する姿にこそ、資本主義社会の創造的發展があることを指摘しながら、彼の動態理論に対する接近には、純経済的領域のみでなく、きわめて広範な領域、すなわち制度としての社会文化の環境、人間の存在傾向、動機あるいは行為の様相等におよぶものであったことを明らかにしてきた。⁽³⁾さて、そのように広範な領域におよぶと考えられるシュムペーター・モデルには、三つの礎石がすえられていた点に注目する必要がある。動機力(motive force)、過程(process)、目標(goal)がまぎれくそ

れである。

ウオリッチ氏は、シュムペーター理論を低開発国の経済開発問題に對置した場合、それに対して右のような否定の評価をくだしながらも、シュムペーター・モデルを構築せしめているこれらの三つの礎石に、理論的関心を惹かれるのである。そうして彼はつぎのようにいう。⁽⁴⁾たとえ今日の低開発国の開発理論として、シュムペーター理論がただちに役立たなくとも、その理論を形成せしめている三つの礎石 (motive force, process, goal) は、いかなる發展理論にとつても、その基盤として役立つ。シュムペーター理論の理論的公準でもって、低開発国の周知の一つ一つの事実を、對照することによって、かような理論方向で、一つの接近方法を導き出してゆくことができるように思われると。さて、ウオリッチ氏がいうように、右の三者が、開發理論の形成にとつて、およそその礎石として理解されるべきものであるとしても、そのためにはおよそつぎの二つの疑問点に対して解答が与えられていなければならないと考える。すなわち、第一点は、それら三者がシュムペーター理論の統一體のために、いかなる意味でその礎石としての役割を果しているか。第二点には、それら三者が、低開發國の開發理論にとつてどのような位置において重要であるのか。すくなくとも、以上二つの問題点は、端緒的な疑問点であるにせよ、きわめて根本的なものであるといえる。しかるに、ウオリッチ氏は、第一点のそれに対して、なんら解明の態度をしめすことなく、第二の問題点にふみこんでおる。そこにはかなり問題があるように思われる。けれども、第一点の問題点そのものが、シュムペーターの發展理論そのものの根本的な検討に通じるものであることはいうまでもない。したがってウオリッチ氏自身は、シュムペーター學說の体系上の理論モデルを分析的には所与として、自己の論議をすすめているとみななければならない。さて、第二点の問題について、ウオリッチ氏は、まず動機力

から順次解明してゆく。その見解を瞥見してゆこう。

企業者が低開発国の開発において、主要な推進力ではないと示唆することは、何も企業者機能が役割を演じるのを、否定するという意味合いではない。企業者は、あくまでも二義的役割を担うものとして位置づけられるということである。なにゆえ、低開発国が停滞的であったか、という理由の一つは、企業者の性格をもった国家的能力が欠如していたという点である、もとより、そのこと以外に、様々な環境が、低開発国を停滞状態にひきとどめさせておく帰因ともなっていたことは、否定できない。しかしながら、これらの国々の企業者には、その性格を發揮する機会が開かれておりながら、その機会を把握しえないままに終ってしまっておる。力強い進取的精神によって、様々な障害を克服してきたというよりは、障害の方がより大きくなってきている、という理由が存するのである。ともあれ、低開発国における企業者は、経済発展の副産物のようにみなされる。よしんばその有用さという意味合いで大目にみられるとしても、企業者の利己的性向からして、拘束されると考えられる。

では、低開発国における、発展過程の主要な開発主体は、なんであるのか。ウォリッチ氏は、この問いに対して、ただちに政府こそ積極的動因であると答える。すなわちつぎのようにいう。程度(6)の大小の別なく、政府が積極的動因である。しかも社会的・国家的そうして民族主義的立場における積極的なそれである。一般大衆が要請するいわゆる高い生活水準欲求の代弁者として、政府は大衆の要求を見通し、これを具体化することによって、その要求を現実の力に形成してゆくとところに、今日の低開発国の原動力があるといえる。このように、ウォリッチ氏は政府活動に第一義的には、その開発主体をみいだすのである。しかしながら、ここに二つばかり問題が伏存していることに気がつく。すなわちその一つは、こうした政府の政策や大衆の刺激は、いかにして現実的に生

成するの、という問題である。いま一つは、それらはどのようにして機能するのか、という問題である。こうした問題が、問われなければならない理由はこうである。もしそれらが原動力であるならば、それらの源泉や機能化の分析こそが、特色のある発展過程について理解を容易になさしめることになるからである。ところがこれらの二つの問題に解を与えるためには過程分析を試みなければならない。

さて、ウオリッチ氏は、発展過程を二つの局面に区別することが、当をえているという⁽⁷⁾。すなわち、その過程がいかにして開始されるか、という点にかかわる局面。(この局面を、以下便宜上、第一局面とよぶ) つぎに、継続をなしている発展過程の性格にかかわる——いわば、いかにして発展過程は進行を保つのか——局面。(この局面を以下第二局面とよぶ)とところで、第一局面に対する理論的分析解明は、停滞状態から経済を脱出せしめる刺激は何であるか。あるいはきわめて緩慢な成長率から、速度を早めさせる刺激は何であるかの問題に対応するのである。(この第一局面は、ラテン・アメリカの低開発諸国には、それほど重要な局面ではない。しかしながら、アジア、アメリカの低開発諸国にとっては、きわめて重要な局面であると、ウオリッチ氏は付言する⁽⁸⁾。)

さて彼は、低開発国において、今日「限界の拡大化」(widening of horizons) のメカニズムが進行していることを主張する⁽⁹⁾。しかもそのメカニズムが、シュムペーター・モデルからかけはなれたものではなく、革新に相似した何ものかを導くものであると主張する。そうして、ひとたび発足した「限界の拡大化」過程の継続は、別の一つの事実として把握する必要があるという。ここにウオリッチ自身の中心的主張が展開してゆく基本的認識が存するのである。すなわち彼はつぎのように主張する⁽¹⁰⁾。低開発国においては、「革新」はおよそ特有の様相であると人々は大きいいかもしれないが、その過程は、多分に同化作用(assimilation)の一つとして、すぐれて記

述されるべきものである。もとより低開発国において、新産業を組織化することは、企業者の率先力の手腕であることを何人も否定しないはずである。だがしかしそれは明かに、創造的革新過程とは非常に相違したものである。

ともかく、同化作用を通じての発展と、革新を通じてのそれとの相違点、ならびにその相違点の意味合いが明かになされなければならない。これがウォリッチ氏の基本的な問題意識である。こうした問題意識を擁立する彼は、つぎのような積極的主張を展開する。（三つの礎石のうちの目標にかかわって）すなわち低開発国の発展過程は、方向づけされた消費志向型の過程であるという見解がそれである。⁽¹¹⁾このことは、その過程が、革新に基礎づけられるのではなくて、現存している様々な革新の同化作用（the assimilation of existing innovation）に基礎をおいているという事実の結果であって、不可避的な結果ではないというのである。

以上のウォリッチ氏の推論は、つぎのように考えることができるであろう。すなわち、低開発国において、発展の原動力を準備し、しかも、発展の目標が、生活水準の向上にある、と考えられるかような方法で、原動力を準備するということが、同化作用の可能性であるということになる。ところで、同化作用の特徴は、ウォリッチ氏によればつぎのようである。誘導発展の一般的概念、ならびに他のどこかで形成された革新から誘導される発展の一般的概念がそれである。⁽¹²⁾いわば、誘導発展による消費志向、ならびに需要のかわりあい達成されてきており、生産と供給の領域への方向づけによって、シユムペーターの発展過程に与えられている足跡と同様、消費への方向づけの影響が、発展の多くの局面において認められるということである。かようにして、ウォリッチ氏の理論前提には、方向づけされた消費志向、ならびに需要が、低開発国の発展の最も重要なしかも他のものと

相異なる基本的特色である、という考え方が、形成されているのである。しかしながら、この区別は、強調点をどこにみいだすかによって生じるものなのである。実のところ、消費は、シュムペーター・モデルの中にその役割を位置づけられており、また、生産は、誘導発展の理論においても、その役割をもっているのである。

そもそも、シュムペーター・モデルは、一九世紀の開発のすんだ経済の総体を記述しようとするものではない。もっとも特徴的な様相のみを分析対象とし、これを記述しようとして試みている。⁽¹³⁾（傍点は浜崎）かくして、英国経済の発展は、消費と需要が主要な役割を演じた多くの局面を経験したのであった。それに対してアメリカならびにドイツの成長は、当初、ある形の誘導発展を経験したと考えられる。すなわちこれらの国の政体は、当初、およそ意識的自覚的経済発展の活動主体の状況を呈してきたとみることができ、非シュムペーター流の何ものかをそこにおいてしめしていることを暗示する。⁽¹⁴⁾では、誘導発展理論と企業者の関係をどのように考えるべきであろうか。ウオリッチ氏の見解をみてゆこう。彼はつぎのようにいう。⁽¹⁵⁾誘導発展の理論において、企業者の役割が強調されないということは、なにも企業者が活気的な機能を達成しないということを意味するものではない。企業者の役割は、国が進展するにつれて、十分に成長しうるのである。自覚的生産が存在するし、またそれが増大しつつある。このことを否定することは、不合理でさえある。まさしくそれは、現実局面なのである。それにしても、方向づけされた供給経済と、方向づけされた需要経済との両者間の区別は、いずれも統計的命題によるものではないのである。供給と需要とは常に事後的 (ex Post) にはバランスする——販売量は購買量として——同一のものなのである。にもかかわらず、不断のインフレーション、ないしはデフレーション現象が意味深いものとなるのである。一人当りの所得水準を所与とする貯蓄率の比較は、たしかに教訓的であるけれども、貯蓄性

向を測定することによって、さほど十分に立証しうるものではないのである。かくして如上の区別は、実は経済を活気づける精神に根本的には依存しているのである。すなわち、節約、利益、事業の成功等々、あるいは厚生、社会的安定、所得の平等等々に与えられた社会的価値に重きをおいているのである。生産志向的経済として発足した先進国においてさえも、これらの価値が、きわめて変革されてきているということは明白なことである。しかしながら低開発国においては、消費志向の価値スケールが当初から一般化しているのである。⁽¹⁶⁾

ところで、経済を生産志向に方向づけられた様に、あるいは消費志向に方向づけられた如く、ラベルを付すことに、なんらの価値判断が含まれているわけではない。シュムペーター流の経済は、一種のロマンチックなアピールをもっているが、しかしその自由放任の意味合いは、今日のおおよその人々にとっては、うのみにしがたいものであるはずである。消費経済の社会的価値は、多くの局面において魅力のあるものである。それに対する市民の評価は、福祉国家にむかう今日の傾向——その国家においては、需要と消費が支配的役割を演じる——に含まれているのである。かくして、人間が理想的な経済を期待するとするならば、その経済は、消費経済の社会的価値でもって、シュムペーター流の経済の個人的効力を結合した経済であるにちがいない。⁽¹⁷⁾

誘導発展が、革新ならびに貯蓄を求めるその能力において、非常に高度な秩序の有利さをもっていることは明白である、いわば革新発展がかつてなしたとげたものよりも、誘導発展の方がずっと急速な進歩をなすとげることができるといふ事実に疑いをはさむことはできない。誘導発展の過程を詳細に分析する場合、革新発展と誘導発展とを区別する否定的方向はもちろんのこと、別の積極的方向をみいだすのである。しかし一面の美点と他面の悪点を強調することが区別の目的ではないのである。目的とするところは、低開発国の進展のために、特徴的な

ものと考えられる諸要因をとりだすことにある。かくしてこの誘導発展の方法でもって、低開発国発展の統一理論形成にむかつて前進することができるのである。⁽¹⁸⁾

では、そのように考えられる誘導発展が意味する発展の内容はどのようなものであるか。ウオリッチ氏の所論をうかがってみよう。⁽¹⁹⁾

誘導発展の過程が工業化志向型経済に傾斜していることは明かである。その理由の一つは、デモストレーション運動の結果によるものである。すなわちデモストレーション運動の結果は、人々を都会的生活様式の方角に導き、生産物需要を烈しくする。このことはひいては、都会化や工業生産でもって進歩の同化作用を導いてゆくのである。いま一つの理由として考えられることは、未知の生産方法の同化作用、とりわけ製造工業の分野において動態的傾向にあるという点である。しかも新しい製造工業の冒険、その冒険から生じる多大な犠牲を克服するために、国家は必要な保護組織ならびにその他の国家的な力を適用することに漸次熟達したものになってきているという事実が同様な方向において作用するのである。

さて、ここにおいて、誘導発展と政府の役割、そしてその機能について吟味、検討を深める必要がある。ウオリッチ氏の主張はこうである。⁽²⁰⁾ およそ革新を軸とする経済発展下の政府の役割と比較した場合、非常に相違したものであろうことは容易に想像されることである。すなわち革新を軌軸とするその場合には、企業者によって発展が遂行されるかぎりにおいて、政府の役割は、二義的ないしは受働的である。ともかくシュムペーター理論が含蓄するものは、この点である。しかしながら低開発国においては、私的企業は弱力である。政府が依然として受働的であるならば、発展は急速に進行しえないのである。かくして、誘導発展は政府干渉のなんらかの手

段を要求するのである。以上が誘導発展過程において政府活動を期待する第一の理由である。つぎに第二の理由は、発展過程の特徴の一つとみられる、より高度な生活水準についての一般的要求の多くが、政治的プレッシュアの形態をとるという点である。第三点の理由は、広範な一般的要請によって、遂行される発展過程における全投資額のうち、社会的間接費部分がきわめて大きな割合を占めるといふ点である。第四点として、貯蓄は、消費志向的経済過程にあるために、当然のこととして、低水準にあると推測されることである。このことはつぎのことを示唆するものである。すなわち、政府は、投資を増大してゆくためには、課税力を利用しなければならぬということである。第五点の理由として挙げうるものはつぎの点である。（この点がもっとも重大なことであるが）すなわち、誘導発展の過程における政府干渉は、創造的発展における場合の国家干渉よりも、政府能力によりずつと適応するものであるということである。このことを具体的にいうならば、企業者による創造的発展は、まさしく、想像を追いもつめ、好機をとらえる積極さを希求し、誤りを訂正する能力を必要とする実験の過程である。これらのことは、政府が優れているということにもとづく事柄ではないのである。ところで、政府の力とは、機構である。しかも誘導発展は、ことのほか圧倒的に機構の過程であると考えられるのである。そこにおいて革新が必要とされないというのは、技術が実例を通じて一般に普及し、周知の事実となっているからである。したがって、政府が、まず第一になすべき作業は、それら技術の適用を組織化することである。このことは、なにも政府が新しいあらゆる経済活動の担い手にならなければならないということを意味するものではないのである。しかし、政府は、経済計画の周知の手段——直接的・間接的——を通じて、経済の発展を方向づけることにある。このことが重要な点である。

以上がウォリッチ氏の誘導発展と政府機能との関係をめぐる論旨である。ここで明かにされていることは、アメリカにしてもドイツにしても、経済発展の初期段階においてはその国の政府は、発展を促進する活動的歩調をとっており、まさしく、彼が主張する誘導発展形態をとってきたということである。まして今日、私的企業の力の弱い低開発国においては、政府干渉による誘導発展以外に、発展過程をみいだすことは不可能である。けれども、その過程において、なにゆえ政府活動を人々は、期待するのか、こうした原理的疑問にたちかえて考察を深めておく必要があるということから、ウォリッチ氏は、右に紹介してきたような五点にわたる理由を、明示しているのである。ともかく、彼の以上の所論からすれば、誘導発展とは、政府の力すなわち機構の展開過程であるとおきかえることもできる。そのことをまた別の表現でいうならば、政府が経済計画のための直接的・間接的な周知の手段をもつて経済発展をすすめた立場で方向づけることにある。

さて、私は、ウォリッチ氏が主張する誘導発展の理論構造を、彼の所論の展開過程に即して素描してきた。そこにおいて、きわめて明瞭な主張点は、シュムペーター・モデルそのものが今日の低開発国に対して適応しないということであった。しかしながらこうした評価を導く理論的根拠を検証する作業に、彼の当面の目的があると、いうよりも、低開発国の経済開発にあたって何が注目されなければならないか、という局面への関心の方が、彼にとつてはより重要であつて、そのかぎりにおいて、シュムペーター理論と自己の主張する誘導発展論との相違点を明確にすることにウォリッチ氏自身の最大の関心事があつたと考えられる。彼によれば、シュムペーター・モデルにおける創造力は、企業者によつて準備される。その過程が革新であり、その目標とするところは、企業者のための富や力の樹立にある。企業者概念にしても、革新概念にしても、すべて生産と消費の領域に属するも

のである。一般の生活水準は、その結果であるように思われるが、その目標ではない。いわば消費と需要の要因は二次的役割を演じるにすぎない。以上がおおよそ、シュムペーター・モデルに対するウオリッチ氏の基本的理解である。それに対して、低開発国の発展過程は、consumption-orientedである。このことは、その過程が、革新に基礎をおいているのではなくて、現存している様々な革新の同化作用に基礎をおいているという事実のその結果である、というのが彼自身の基本的推論である。彼のこの推論を一步進めてみれば、こういうことになるであろう。すなわち、低開発国において、発展の原動力を準備し、しかも発展の目的が生活水準の向上にあると理解される、そのかぎりでの方法で、原動力を準備するということは、同化作用の可能性であるということになるのである。したがって、やや図式的表現でいえば、シュムペーター・モデルにおけるinnovatingなあるいはoriginatingな発展に対して、ウオリッチ氏は、assimilationに基礎をおいたderived developmentをもち出す。経済構造そのものに対する理解において、前者がProduction-orientedであると規定し、彼はconsumption-orientedに立脚するという点である。

ところで、今日、低開発国において政府の果す役割がきわめて重要なものであるという点については、諸学者の見解が、ほぼ一致するところである。ところが、ウオリッチ氏のように、私的企業者対統治機関というように対照化した場合、その論理は、当然の如く、シュムペーター・モデル対低開発国、というきわめてシェーマ的対照化を導くことにもなる。しかしながら、この対照化が何をしめしているかは、彼によってさほど明瞭に説明されているようには思えない。ただもっぱら独立した対照化としてのみ処理されようとしている。(すなわち前述したように、彼の場合、低開発国における発展がderived developmentであって、originating developmentではないという

その対照化) しかしながら、このような対照化を試みる前提として、シュムペーターによって理解されている政府機能と、低開発国のそれとは性格的にどうか、といった問題について当然検討を深めておく必要があると考える。しかしながらウオリッチ氏はこの点を完全に欠落しているのである。しかしながらH・W・シンガー氏が「政府は共同体の組織化された政治的意思の表現である」⁽²²⁾とのべているところに、前記の問題点を深める手がかりが存する。そうしてまた、A・ボンネ氏が「行政学ならびに行政理論の領域における近代の諸学派は、事実上、つぎのことを仮定している。すなわち政府は中立的次元で作業することができるし、しかもまた共同体の利益を十分に——政治的狀態を変更することと無関係に——促進することができるのである。西欧諸国における経歴は、経済発展の諸計画——すべての国民の福祉を促進するという視角で組成された——を遂行するにあたって、近代的な行政能力の評価を支持するのである」⁽²³⁾と、主張しているところに、H・W・シンガー氏の右の見解はより一層徹底的に鮮明化していると考えられる。しかしながら、そもそもシュムペーターは、政府の諸政策の中立性をイデオロギー的幻想であるとし、⁽²⁴⁾その視点から政策と政治との両者を区別することを拒否したのであった。このようにみえてくると、ウオリッチ氏の右のような図式的な対照化には、検討を要する問題点がかなり残されているといわねばならない。これらの点については、第四章において論議を展開することとし、ここでは割愛せざるをえない。

さて、そのように、ウオリッチ氏の所論には、いくつか問題点が存しながらも、ともかく、シュムペーターの発展理論を、今日の開発理論形式とのかかわりあいでも再検討、再評価を試みる契機を提供したといえよう。そこで以上のような彼の問題提起にかかわって、とりわけシュムペーター理論への否定的評価に対してD・リムマー

氏がどのような反論を展開してきているかをみてゆこう。

- (1) H. C. Wallich; op. cit., p. 190
 - (2) H. C. Wallich; Ibid., p. 194
 - (3) 拙著『ネットワーカー経済学の基本問題』に収録した論文「企業者と資本主義過程の革新について」参照。
 - (4) H. C. Wallich; Ibid., p. 190
 - (5)(6) H. C. Wallich; Ibid., pp. 191—194
 - (7)(8)(9) H. C. Wallich; Ibid., p. 192
 - (10) H. C. Wallich; Ibid., p. 193
 - (11)(12)(13)(14) H. C. Wallich; Ibid., p. 194
 - (15)(16) H. C. Wallich; Ibid., p. 196
 - (17)(18) H. C. Wallich; Ibid., pp. 196—197
 - (19) H. C. Wallich; Ibid., p. 198
- 誘導発展の概念について、ウナリッチ氏は、脚註でつぎのように付記している。すなわちこの言葉は、もろろ他の国々の成長から受動的にひきこる植民地的発展過程を示唆することを意味してゐるのではなく、これはブレイブマン博士が「過去の発展」(development of the past)とよんだ発展の型である。博士の『経済成長の理論的・実践的諸問題』(Theoretical and Practical Problems of Economic Growth, pp. 5 f. United Nations Economic Commission for Latin America, 1950)より転載照りだした。
- (20) H. C. Wallich; op. cit., pp. 200—202
 - (21) A. G. Chandavarkar; "Public and Private Sectors", Economic Development and Cultural Change, VII (April 1959)
 - (22) V. K. R. V. Rao; "Private Enterprise and the Second Five Year Plan", Commerce, Annual Number, 1956
 - (23) H. W. Singer; op. cit., p. 22
 - (24) Alfred Bonné; op. cit., p. 22

三 D・リムマー氏のウオリッチ氏批判

——シュムペーター・モデル評価をめぐる問題視角——

D・リムマー氏は、ウオリッチ論文に続くH・W・シンガー論文⁽¹⁾、ならびにA・ボンネ論文⁽²⁾をふまえて、あらためて、シュムペーター理論を低開発国の開発問題にぶちあてる。彼の主張の意図は、つぎの点にある。すなわち、シュムペーター・モデルは、およそ五〇年前のヨーロッパならびに北米の繁栄した資本主義経済における発展のメカニズムを、記述することを企てたものであった。それとは、まったく相異った経済的、社会的な歴史を経験してきたアジア、アフリカならびにラテン・アメリカの低開発諸国の現実の諸状態に対して、シュムペーター・モデルが完全に適合しうるとしたら、まさにそれは驚異である。ある意味では現実の諸情勢に対して、その理論の適用性を問題にするということはアナクロニズムである。それにしても、シュムペーターの作業が、経済発展の過程の解釈をめぐる、真に数不尽なシステムティックな思想体系の一つであることは否定しがたい。とすれば低開発国に対して、その理論が適用しがたいものである、と主張するその適確な根拠を、検証することが必要であり、しかも有意義な作業である。そうした視点からすれば、ウオリッチ論文は、今日の低開発国における実践的諸問題を、シュムペーター理論との対比において、経済学の次元にたかめようとしたその努力は、評価せざるをえない。しかしながら、彼の積極的主張の立論過程には、様々な問題点が存在すると考えられる。いざれにしても、ウオリッチ氏のその論稿は、やがて、シンガー氏がシュムペーター理論の点検を試みる所論の出発

点ともなり、また、シュムペーター・モデルと低開発国における諸条件との一致、不一致をめぐる分析を試みたボンネ氏の作業契機ともなっているかぎり、ウォリッチ氏の基幹的問題提起にふりかえり、これを検索することに、当面の第一の課題がある。つぎに、シンガー氏、ボンネ氏の両者が、低開発国とシュムペーター・モデルとのかわり合いをどのように理解しているかを明確にした上で、（第二の課題）シュムペーター理論そのものの性格を反省し、その理論に対する現実的理解、（低開発国の開発に関連して）、の姿勢を問題とする。（第三の課題）リムマー氏の根本的課題）（しかしながら、彼はそこにおいて、シュムペーター理論の限界性を看過してはしないのであるが。）

以上の課題にせまるリムマー論文は、他面においてシュムペーターの『経済発展の理論』を、資本主義経済過程の景気循環の説明視角からとりあげる、かつての研究者の姿勢に反省をうながし、今日の世界経済が直面している様々な実践的諸問題を、シュムペーター・モデルのもとで、いかにビルドしてゆくことが可能かを、あらためて問題提起したといふことができる。

さて、シンガー論文、ボンネ論文の両者が基本的にはウォリッチ氏の主張に賛意を表する立場で論議が展開されているのに対して、リムマー氏は、ウォリッチ氏の主張そのものに、否定的見解を表明する。そうして、シンガー論文、ボンネ論文の両者に対しても詳細でしかも痛烈な批判をなげかけるのである。

ところで、リムマー氏の所論を支える基本的問題視角とみなされるもの、ならびにその視角に立脚して彼が導きだす帰結をまず最初に紹介した上で、次章以後において、右記した人々とリムマー氏との間では、どのような論点が争点となっているかを検討し、その根拠を探ってゆこう。（以下本章で紹介するリムマー氏の見解が、すでにそれを示唆するものであるが。）

〔リムマー氏の基本的視角〕

(一) 政府活動と私的活動との相違は、ただ制度的な形式のちがいである。この考え方がシュムペーターの見解でもあった。したがって、彼の見解は、彼が理論化を試みたブルジョワ社会についてよりも、今日の低開発諸国にとって根拠のある有効なものである。⁽³⁾

(二) シュムペーターの企業者動機について論議を展開する場合、「私的富裕」(private enrichment) について評言することは、全く役立たないことである。企業者タイプに関するシュムペーター自身の性格づけを想起し、検討する必要がある。⁽⁴⁾

(三) 私的な組織機構とは別に、政府装置を通じて、企業者エネルギーに出口を与えることは、重要なことではないように思える。政府活動は、人間活動の諸形式とは別のなんらかの形体を明確に区別することが可能な特性があるわけではない。企業者動機というものは、様々な制度を通じて活動に移される。その制度とともに変化するのではない。更に、企業者動機は政府装置による企業者性の指導が、革新のやり方において——シュムペーター理論と比較した際に——重大な相違を意味するかどうか考察しなければならぬ。⁽⁵⁾

以上の三点がおおよそ、リムマー氏の問題接近の基本的視角といえよう。さてそのような視角から、つまるところ彼はどのような帰結を導いているか。私は、それをつぎの三点に集約する。すなわち、第一点はウオリッチ氏、シンガー氏、ボンネ氏等に対する反論の根拠の明確化。第二点は、シュムペーター理論について、現実の問題状況との対応において、再検討、再評価を試みるにあつたての基本的視点にかかわる見解。第三点は、低開発国の開発問題次元で、シュムペーター理論そのものをもつ限界性に対する見解がそれである。そこでまず第一点

をめぐる彼の結論から彼自身に語らせてゆこう。

「リムマー氏の帰結」

(一) ウオリッチ氏、シンガー氏、ボンネ氏らの主張の主旨は、低開発国における経済発展は、およそ革新方式では進展しないという点にある。シュムペーター理論は、低開発国に対して適応しない、ということをも、説明するのには彼等の主眼点がおかれている。ところが、こうした課題をめぐって試みられた彼等の作業は、経済的革新を技術的進歩と同一視する試みであったり、また低開発国の従属を、外国技術にもとづいて強調する試みに立脚しているのである。いわば私的企業者は、低開発国においては、公的権能に対して相対的に無価値なものである、ということを明らかにすることに、それらの試みは存したり、また生産技術面への外国技術の影響はいかにおよばず、消費者の嗜好面への外国の影響を強調することにあつたり、また革新を条件づけている様々な要因の重要性を強調することによって、革新の重要さということをきわめて小さく評価する立場にある。しかしながら、以上のような試みに賛意を表することはできない。その理由は四つある。その一つは、シュムペーターの革新を、技術上の新奇さと同一視する試みは、弁護の余地がないほどのあやまちである。第二にあげる理由は、私的機構を通じるかわりに、公的な集団を通じて企業者活動の指導を行うという点は、なんら根本的な経済上の相違を、本来意味するものではないのである。極端な対照面が現出するのは、以下のような名だたる非科学的見解からである。すなわち「国家」活動の性格について、一般的に採られている見解、そして私的個人の企業者の動機と比較されるような政治家の企業者動機へ志向する単純な精神態度に、反映をみいだす見解がそれである。第三の理由は、消費者の嗜好についての問題である。消費者の嗜好面への外国の影響は、部分的な力である。したがって

低開発国においては、新産業やサービスを設立するために、企業者機能は要求されないという主張は、認めることはできない。第四の理由は、経済的メカニズム自体の重要性を強調することよりも、むしろシュムペーターの主張する経済的メカニズムが育てるデータの諸変化の重要性を強調する方が、関心の動向を「経済理論」によって記述される事実集団」からさしめすことになる。以上のような理由からして、右記した人々の見解——シュムペーターの経済発展理論を低開発国に適用することは不適當である——は、理論的証明をなら得るものではない。反対に、シュムペーター理論のきわめて特徴的な様相、すなわち質的变化、革新的能力の明確な性格、ならびに経済的進歩の本質的に非調和的性格の重要さといった点についてのシュムペーターの強調は、開発国の経済発展の研究にとって、きわめて適切なものであり、関連深いものである。⁽⁶⁾

ウオリッチ氏、シンガー氏ならびにボンネ氏に対する以上のような痛烈な反論をなげかけるリムマー氏は、彼等が主張するような、シュムペーター理論に対する評価が生じてくる根拠は、そもそもどこにあるのか、という反省を忘れてはいない。そのことが結論の第二点に集約されてでてくるのである。すなわちこうである。

(二) そもそもシュムペーター理論で満足できないというのは、その理論の実践的利用の不足という意味に根本的理由があると考えられる。ところで、シュムペーターの発展理論が二つの戦争間に享受した名声はいったい何によるかといえは、たまたま当時、実践的関心の中心として惹起してきた景気循環の説明を、その理論が提供していることに帰せしめられる、という点である。この点は、注目すべきことである。最近にいたって、いわゆる低開発国の経済開発の実践的問題が、漸次経済学の関心にかみあつてきたのであるが、シュムペーター理論は、この観点からすれば、ほとんど利用に供しえないものと思われてきた。そのような考えは、いったいどのような

考え方から生じているのであろうか。それは、シュムペーター理論に対するつぎのような解釈に原因があると思われる。すなわち、シュムペーターの理論は、急速な発展がすでに惹起している社会における発展のメカニズムの記述を提供するものである。この社会を所与とすれば、革新の概念の分析的価値を、仮設的な静態の流れの均衡破壊として理解することは、困難ではないのである。しかしながら、低開発国における発展の実践的問題と取り組む経済学者は、仮設的静態と、現実的変化との間の分析的区別に関心がむけられているのではなくて、起りつつある緩慢な経済発展と、そうして望まれる急速な経済発展との間の実践的区別に関心が深められているのである。したがってシュムペーターの革新概念についての誤解が生じるのである。（すなわち、革新が創造的な経済的反応であるのに対して、革新を具体化する主張や、革新に技術的内容を付与する主張や、革新間の程度の区別をなす主張や、そうしてまた知識、民勢統計、政治等々の領域における諸変化を探究する主張がなされてくるのである）なぜそのような誤解が生じるかといえば、発展のペースにかかわる先入主が存するからである。（すなわち、誰人もが社会を開発することを期待すると同じように、すでに急速に開発が進んでいる社会についてシュムペーター・モデルの中には、要領をえないものがあるはずであるという先入主が存するのである）。

シュムペーター理論そのものに対する誤解と先入主にもとづく解釈の結果、今日その理論が、現実的諸問題に對決して、正しい評価を享受しないままに論議されている、とリムマー氏は考える。ところで、すでに指摘したように、彼は、シュムペーターの理論を、低開発国の開発問題に適応しようとする場合、そこに理論的限定が横たわっていることを看過してはいないのである。すなわち彼が導く帰結の第三点がそれである。そうした理論的限定が生じる理由は、シュムペーターが仮定した如く、資本主義体系についての社会学的データが、低開発国

には欠如しているが故である、とリムマー氏は主張する。⁽⁹⁾ そうしてつぎのような結論を導く。

(三) シュムペーター・モデルにおける企業者と低開発国における企業者との両者の動機の比較対照を行うといふことは、単にナイーブな事であるにすぎない。企業者性の個人的心理的創造にかかわって、導きだされる対照点は、存しないのである。しかしながら、なんらかの対照点が引きだされうるのは、革新的活動の社会的創造とよばれうるところにおいてである。すなわち、それは、社会的態度ならびに社会的制度が、企業者活動に対して提供する援助においてである。社会的環境が革新に対して形成する抵抗に、シュムペーターが関心をむけているということは、たしかにいえるのである。シュムペーター・モデルは、きわめて制度的性格の強いものである。

——いわば歴史的時点における資本主義的現実のモデルとして意図されたものである。シュムペーターのヴィジョンにおいては、資本主義社会というものは、企業者過程をめぐって組成されるのである。低開発国の経済発展のための政治的圧力にもかかわらず、同様なことが(シュムペーターのヴィジョンの内容がしめすようなことが)それらの低開発国についてもいいうることは、明白なことではないのである。このことがシュムペーター・モデルと低開発国の現実との間に重きをなすと考えられる対照点なのである。したがって、経済の運用ないしは技術的特性あるいは行政形体等の比較対照ではなくて社会学的ないしは、社会心理学的データーの比較対照なのである。⁽⁹⁾

ところで、リムマー氏のこの第三点の結論のように、両者間の対照点ならび問題点が明確になつてくると、低開発国の開発をめぐる実践的関心は、経済理論家をば、純粹に経済の領域にとどめることなく、その他の社会科学の領域にたえず誘引することとなる。ここにおける思考の論理として、シュムペーターの考え方が援用され

る。すなわち、人間活動の主要な動機が、結局のところ経済学によっては究明されるものではなく、社会についての一般的理解ないしはヴィジョンが、その社会における経済発展について、経済学的理論化を試みてゆくための不可欠な前提条件である、といったシュムペーターの資本主義観の認識論理がそれである。

以上の考察から明らかになったように、リムマー氏は、基本的には、シュムペーター・モデルを軸芯にすえて、(低開発国問題に対応させた場合、そこには理論的限界性があることを認めつつも)理論構成してゆく(しかも社会科学の諸領域の綜合体系をベースとして)意図をしめしていると考えられる。その意味からすれば、ウォリッチ氏、シンガー氏ならびにボンネ氏等とは、シュムペーター理論の評価において、根本的に大きく相違せざるをえない。ともかく、リムマー氏が開発問題に、シュムペーターの発展理論を積極的に対応させて、問題分析の視角を明確にしたことは、それなりにあらたな問題提起であるといえよう。

さて、彼の基本的主張点をふんまえた上で、論者間の争点の具体的点検に入つてゆこう。

- (一) H. W. Singer: *Obstacles to Economic Development*, Social Research, XX, 1953
- (二) A. Bonné: *Towards a Theory of Implanted Development in Underdeveloped Countries*, *Kyklos*, LX, 1956
- (三) D. Rimmer; *op. cit.*, p. 428
- (四) D. Rimmer; *Ibid.*, p. 430
- (五) D. Rimmer; *Ibid.*, p. 431
- (六) D. Rimmer; *Ibid.*, pp. 447—448
- (七)(八) D. Rimmer; *Ibid.*, pp. 448—449
- (九) D. Rimmer; *Ibid.*, p. 450

四 争点—その(Ⅰ)

— シュムペーター体系に位置する「政府」をめぐって —

すでに第二章でみてきたように、ウオリッチ氏の中心的な主張の第一点は、低開発国の発展過程は、方向づけられた消費志向にあるという点であった。そうしてこのことは、その過程が革新に基礎をおいているのではなくて、現存している様々な革新の同化作用に基礎をおいているという事実の結果としてとらえられるということにあった。ところで、シンガー氏によれば、低開発国とシュムペーター・モデルとの相違点は、発展の動機力、方法、ならびに目的にかかわって区別され、つぎのような主張となつて展開する。⁽¹⁾ (一)シュムペーター理論において、私的企業者は、発展の推進力であるけれども、低開発国の現実においては、このことは政府についてもいえることである。(二)シュムペーター理論の場合、発展は新しい生産技術の方法によつて生ずる。しかるに、低開発国においては、先進国ですでにつくりだされた技術導入から生じる。(三)シュムペーター理論における発展の動機は、企業者達の野心的な供給面に存するが、低開発国においては、改善された生活水準後に熱望される需要面に存すると。シンガー氏が主張するこのような三点にわたる対照点、ならびにその理解のしかたはおよそウオリッチ氏の場合と基本的な点においては、なんらちがいは存しないと思われる。リムマー氏は、このシンガー氏の見解について、つぎのようにコメントする。すなわち(一)と(三)のケースにおける比較は、明かに、強調点の比較対照にすぎない。(二)の場合における比較対照は、言葉づかいの偶然的出来事であるのに、ウオリッチ氏にしても、シンガー氏にしても、絶対的なものとして考えているように思える。⁽²⁾ リムマー氏は、このように批判をなげかける。

ところがシンガー氏の三点にわたる比較対照、それらに対するリムマー氏の反論、ならびにシュムペーター理論に対する積極的評価のうちに、実は彼らの争点が浮彫りされてきているのである。すなわち、第一点は、政府活動をめぐる論議である。第二点は、発展の動機にかかわる見解の相違点。第三点は、シュムペーターの革新概念をめぐる理解の相違点である。そこで、まず第一の争点をめぐる論議から考察を深めてゆこう。

ウオリッチ氏の場合、政府は「低開発国における発展が、誘導発展であって、創造的発展ではない」という彼の基本的命題に付带的なものとして提起される。しかしながら、右の命題をふんまえて考えれば、すでに指摘してきたように、彼は私的企業者対統治機関としての政府、というコントラストな側面を、提起しているとも考えられるのである。そのようなウオリッチ流のコントラストよりも、きわめてはつきりとした形式で、しかも独立した対照点として（すなわち、低開発国における革新、ないしは企業者性が、概して私的個人の作業ではなく、政府機関の作業であるということの意味する）理解しているのがシンガー氏の場合であろう。それにしても、ウオリッチ氏は、政府活動について評言した際に、つぎの示唆を与えていたことを想起する必要がある。すなわち、シュムペーター・モデルは、先進国のほとんどの国々に、適合するのに失敗していることはいうにおよばず、あらゆる低開発国に対しても失敗するということを。そうしてまた彼は創造的発展に関連して政府機能についてつぎのように主張していたのである。「発展は企業者によって急進的に遂行される。政府の役割は、第二義的ないしは受動的なものである。このことがシュムペーター理論の含蓄する内容である」と。⁽³⁾ところが、彼は続けてアメリカ、およびドイツの政府が他の国々の政府と同様、しばしば発展を促進するために活動的歩調をしめしてきたことを挙げ、このことはとりもなおさず、これらの国々の発展が誘導発展の性格をしめしてきたことを物語るものであって、

まさにそれは非シュムペーター流の發展形態をしめしてきたことを暗示するものである、⁽⁴⁾とも強調していた。たしかに近代工業の創業期において、政府機能の果す役割がいかに大きなものであったかを否定することはできない。シュムペーターとても『景気循環論』(“Business Cycles”, 1939)において、つぎのようにのべているのである。「とりわけ、ドイツでは、君主とその官僚とは、数世紀間、経済生活の支配的な要因となった。三〇年戦争後の再建の事業は、若干の領域では、ほとんどもっぱらかれらによってなすとげられ、その後の發展のすべての基礎もかれらによって置かれた。……近代工業を先導したのは——ドイツでは——企業ではなく、むしろ国家ではなかったか。答えは——国家の活動がほとんどすべてであったというような情勢を生みだしたのは三〇年戦争であったという趣旨の条件づきではあるが——肯定的である。そして各個の場合に相応した配慮をするとき、同じ答えは他の諸国にもなされるに相違ないだろう」と。⁽⁵⁾このようなシュムペーターの叙述を前述したウオリッチの見解と対比してみるかぎり、両者の見解になんらギャップは存しないかのようなのである。しかしながらシュムペーターが右の叙述に続いて、つぎのような主張をなしている点をみおとしてはならない。すなわち「ドイツの君主は、多くの場合に、……とりわけ鉱山業において、直接に企業者機能を果たした。さらにドイツの君主は、制度的枠組の改造(法政上の改革、その他)や環境の改善(運河と道路建設その他)によって、また種々なやり方で——そのものは事実われわれが通常、重商主義政策という言葉で理解しているものの範囲にはいるが——革新企業を奨励することによって、革新企業の要件となった。このことはわれわれの一般的な図式を、きわめて自然的な誤解から守る機会を与える。われわれは特定範囲の問題をとりあつかっているものであり、われわれの図式はそれに役立つように工夫されてきた。われわれの図式で『原因』や『結果』としてあらわれるものは、分析の他の面で

は、また他の問題範囲では原因や結果である必要はない。企業者が社会的事物の唯一の主動力であるとはいわれ
ない。企業者がどの程度まで社会的事物の主導力であるかという問題そのものは、われわれの課題外にある。他
の目的のためには、他の要因を、なかならず政治の才を強調することの方がずっと正しいかもしれない。同時に、
政治の才——重商主義的あるいはその他の——は、われわれの面では、特別な同格の要因としてはいってこない。
われわれにとっては、それは、特殊の種類の企業者であるか、さもなければ与件を形づくる一つの力である。こ
のことを承認することは困難であろうが、理解されなければならない。⁽⁶⁾ さてこの叙述の後段の部分、すなわち政
治の才 (Statercraft) は…特殊の種類の企業者であるか、さもなければ与件を形づくる一つの力である、という命
題には、ウオリッチ氏の見解と大きく相違する論理が伏在しているように思われる。シュムペーターがことわっ
ているように、この命題を承認することは困難であるかもしれない。しかしかに理解するかがたしかに要請さ
れるであろう。右の引用文の全体から明らかになるように、彼のモデルは、資本主義経済過程の本質を含むもの
として彼自身とらえながらも、すくなくとも資本主義発展の若干の段階においては、政府活動は重大なものであ
ることを認めている。それにしても、シュムペーターは、政府の企業者の活動を私的企業者とそのモデルにおい
て、機能的に区別していないのである。しかも分析水準を根拠として、たとえば立法の改革にみられるように、
発展を促進しようとする政府の政策は、外部的要因——データーを形成する力——として処理され、論議されて
いるのである。この点に関連してリムマー氏は一つの問題を提起する。すなわち「シュムペーターの理論構造に
付されている政府活動についてのこうした処理は、論理的には正しい。だがしかし、そのことは、一般に承認さ
れる様々な事実の記述につれて、その理論の無効性を暗示しないか」と自問しながら、リムマー氏は、続けてい

う。「この点に関して、シュムペーターを擁護することは困難なことではない。たとえば、彼のモデルは資本主義過程をもつとも純粋な型において記述するものであるということがいえるのである。しかもその純粋型においては、非政府的独創力は革新を形成する際に政府の諸政策をきわめて影のうすいものにしてしまふのである。」⁽⁸⁾そのために、ウオリッチ流の解釈（すなわち「シュムペーター・モデルは一九世紀の開発のすんだ経済の総体ではなく、最も特徴的な様相のみを記述しようとして試みてゐる」）が生じるのであると、リムマー氏はいう。⁽¹⁰⁾

ところで、シュムペーター自身は、政府活動の性格についてどのような理解をしめしていたか。この問題についていささか点検を試みておかなければならない。すでに紹介した如く、シュムペーターは、政府の諸政策の中立的性をイデオロギイ的幻想であると主張し、その視角から政策と政治との両者を區別することを拒否したのであつた。彼はその点に関連してつぎのようにもべていた。「われわれが国家政策ならびに諸政策について語ることができるのは、きわめて特定觀念において、のみである。一般的に宣言された諸政策は、想像上の種類の国家によつて保護されるはずの「共通善」の外部的諸原理の中へ、それを適合する諸政策をすべてのグループは称揚するけれども、政治的ゲームにおけるポイントのための党派の争いにおいて、自己自体を主張する集団の利益や態度の言葉の表現以外の何ものでもないのである。政策は政治であるということを理解しない人は、政治的円熟に達しない人なのである」⁽¹¹⁾と。さて、このような政府活動についてのシュムペーターの認識構造が、どのような学説史的系譜をたどっているかを、ここで探らうという意図をもたない。しかしここで明確にいひうることは、彼がマルクスの政府をめぐる定義（「全ブルジョワジーの共通問題を処理するためのコミティー」）に、かなり関心を深め、マルクスが政府を哲学的暗影の世界（philosophical clouds）から現実的分析の困難な世界へひきおろす責任ある作

業において、すぐれて科学的業績をしめしているという点で、彼を高く評価していることである。⁽¹²⁾ いずれにしてもシュムペーターの政府論とマルクスのそれとの学説史的系譜をめぐる問題は、それなりに究明されるべき一つの課題であろう。それは他日に期すとしても、ここでいいうることは、シュムペーターが、政治的にみて、およそ多分に影響のある集団の利益ならびに要求と、政策との間に存している深い関連性に着眼していることをみおとしてはならない。すなわちブルジョワジーの社会においては、政府活動は、ブルジョワの姿勢によって強力に規定づけられ、条件づけられるというその論理である。さらに、発展の動因である成功的企業者が、核心であるそのような階級は、ブルジョワ階級であるところから、⁽¹³⁾ その階級の利益における政府の諸政策は、——企業を促進するための活動かどうか、あるいは、自由放任の無作為かどうか——必然的にシュムペーター・モデルにおける発展の伝導である、ということは直に理解されるのである。このようにみてくるならば、およそマルクスにとつてそうであったように、シュムペーターにとつても、政府が資本主義の発展を助成しているかぎりでは、政府の業績は、ブルジョワ階級の業績にくみこまれ、包含されるものとなるのである。

以上、私はシュムペーターの政府論を簡単に跡づけてみた。さて彼の政府論を点検することによって、ここに一つの問題を解く鍵が存したのである。すなわち、シュムペーター・モデルにおいて、政府活動は何故それとときりはなして別に区別されていないか、という問題に対する解答である。まさに右の傍点を付した箇所が、その問題に対する根本的な説明となりうるであろう。ともかく、このように、シュムペーター・モデルと政府機能との関連性を検証してくると、ウオリッチ流の低開発国対シュムペーター・モデルの対照化、ならびにその対照化から必然的に考えられる系、すなわち両者の政府機能の対照化には、リムマー氏ならずとも、問題点を看取せざる

をえないであらう。すでに紹介した如く、まして、シンガー氏ならびにボンネ氏のように、政府は共同体の組織化された政治的意思の表現である、という見解と、シュムペーターの見解すなわち政府を「人々の意思や共通善 (common good) を具体化するために努力する一種の神として」⁽¹⁴⁾ 認める態度をしめさない所論とには、相当大きな距離があるといわなければならない。シンガー氏等の主張する、「組織化された政治的意思」が、いわゆる「共通善」にもとづくものであるならば、リムマー氏がいうように、この「共通善」はなんら科学的概念ではなく、(G・ミューダール氏はまさに「共産主義的虚構」と呼んできている)⁽¹⁵⁾ 形而上学的虚構といわなければならないであらう。この点について、リムマー氏はつぎのようにいう。「社会的な利益、社会的要求、社会的意思等の正体は、科学的に決定しがたいのである。科学的水準のもとでは、これらの事柄は存しないのである。かくして政府の政策は、共通の利益である、あるいは利益ではない、ということを明かにすることは不可能なのである。存在している一切のものは、共通の利点が横たわっている場面についての多数の意見なのである。したがってあらゆる政治家は、共通の善を探し求めることを表明する。いかなる機会でも、その事実によって、政策はたまたま具体化される意見が中立的な性格を獲得するということは考えられないのである。……いわば傷ついた観念としてでなく、論理の問題として、政策が政治なり、(“policy is politics”) という結論は、⁽¹⁷⁾ かけられないのである」。このようにして、さきに紹介した(第三章)リムマー氏の基本的問題視角の第一点と、シュムペーター理論に対する積極的評価の帰結が形成されてくるのである。すなわちそれを要約してみるならば、政府活動と私的活動との相違は、制度的形式の違いにすぎない。これがシュムペーターの見解であった。この見解は、彼が理論化を試みたブルジョワ社会についてよりも、今日の低開発国にとつてより根拠のあるしかも有効なものである、という考え

がそれである。ところで、この帰結を導く論理過程には、いわゆる発展の動機をめぐってリムマー氏の態度がかなり明確に表明されているとも考えられる。そこで第二の争点、すなわち発展の「動機」にかかわる相違点に論議をうつしてみたい。

- (1) H. W. Singer; op. cit., pp. 19—20
- (2) D. Rimmer; op. cit., p. 424
- (3)(4) H. C. Walllich; op. cit., p. 195
- (5) J. A. Schumpeter; *Business Cycles*, New York and London, McGraw-Hill, 1939, I p. 234 邦訳書 第五分冊 三四九頁
- (6) J. A. Schumpeter; *Ibid.*, p. 235 邦訳書 第五分冊 三四九—三五〇頁
- (7)(8) D. Rimmer; *Ibid.*, p. 425
- (9) H. C. Walllich; op. cit., p. 195
- (10) D. Rimmer; *Ibid.*, p. 426
- (11) 本文の引用文はシカゴヴェーターが、シカゴに集むる Walgreen Lectures のためノートしたものであるが、死亡のため発表の機会がなかった。スミソンの教授がシカゴヴェーターの演題記 (Arthur Smithies; *Memorial: Joseph Alois Schumpeter*, 1883—1950, *American Economic Review* XL, 1950, p. 644) を記した際、そのノートの内容を引用している。著者の・因・ノットを離集した「Schumpeter, *Social Scientist*», 1951) は、著者の手記である。
- (12) J. A. Schumpeter; “The Communist Manifesto in Sociology and Economics”, *Journal of Political Economy*, LVII, 1949, p. 209, J. A. Schumpeter; *History of Economic Analysis*, 1954, p. 433n
- (13) J. A. Schumpeter; *Capitalism, Socialism and Democracy*, 3d ed; London; Allen and Unwin, 1950, p. 134
- (14) J. A. Schumpeter; “The Communist Manifesto in Sociology and Economics”, op. cit., p. 209
- (15) G. Myrdal; *The Political Element in the Development of Economic Theory*, London, Routledge, 1953
- (16) D. Rimmer; *Ibid.*, p. 428

五 争点―その(Ⅱ)

——シムムペーター体系の基底にある発展「動機」をめぐって——

すでに考察してきたように、ウオリッチ氏によってつぎのように解されていた。すなわち低開発国における発展の動機は、より高い生活水準ということが特徴的な目標であるのに対して、シムムペーター・モデルでは、企業者のための富や力の地位の樹立にこそ発展の目標があると。この見解に対して、リムマー氏はつぎのような論難のあることを指摘する。すなわちまず第一点は、右の政府活動をめぐる論議から当然の如く誘発されてくる疑問点であるが、「生活水準の向上ということが発展の目標である」という論点には、つぎのような疑問、すなわち、その目標は誰の目標なのか、という疑問が生じてくる。意思だとか目的だとかいうものが、社会に帰せしめられる危険が明かに存するのである。その危険がもっている形而上学的な論理的意味内容を別としても、こうした処置は、つぎのような誤ちをおかしているのである。すなわちシムムペーター・モデルにおける発展の創始者の動機と、低開発国における発展の終局的受益者動機とを対照化する誤ちをおかすことになるのである」と。⁽¹⁾いまシムムペーター・モデルによって記述される資本主義発展の社会的目標が、一般的な生活水準の向上にあるというならば、前述したところの政府活動における「共通善」、すなわちミュルダールの表現でいうならば「共產主義的虚構」(“communist fiction”)に依存するに等しい。この点は、ウオリッチ氏もいささか察知しているのか、シムムペーター流の経済学においてさえも、企業者利潤は、もとより政府ないしは国民によって形成されるような国民的目的ではないと述べているのである。しかしながら、彼はシムムペーターの理論的枠組においては、政

府にしても、国民にしても、両者いずれもが基本的主動者（prime movers）ではなく、と主張しているのである。⁽²⁾ そうしてまた低開発国におけるより高度な生活水準の目標は「リーダーシップの場（the locus of leadership）」が、企業者の領域にあるのではなくして、政府のしかも日常的な領域にあるという事実の自然的な結果なのである。⁽³⁾ とものべているのである。ところで、リムマー氏は、こうしたウォリッチ氏の所論に閑説してこういうのである。すなわち、政府統治を通じて行使される経済的指導性を考察するために、国民の好奇心強い感念が存在するのである。低開発国における企業者は、——政府の統治装置を通じて活動しているために——シュムペーター・モデルにおける企業者動機によって動かされるかわりに、一般的な生活水準を改善しようとする願望によって動かされているということなのである。⁽⁴⁾ それでは、シュムペーター・モデルにおける企業者動機はそもそもどのようなものか。シュムペーター自身は、『経済発展の理論』において、この点についてかなり緻密な論議を展開しているのである。⁽⁵⁾ さて、彼の主張する企業者活動は、慣行軌道の領域を出ることに存する。したがってそのためのいかなる一步といえども困難を伴い、しかも新しい要因を含むと考えられる。しかもこの要因をその中に含み、この要因をその本質とする現象こそが正に指導者活動なのである。ところでシュムペーターは、こうした困難の性質を、(一)経済主体そのものの能力にかかわるもの、(二)経済主体の態度にかかわるもの、(三)社会環境の反抗の側面にかかわるものとの三つに分類して考察を進める。すなわち第一点についてこういうのである。「経済主体が慣行軌道の外に出るときには、軌道内では多くの場合甚だ正確に知られている決断のための与件乃至行爲のための規則が欠けている。……慣行の計画は、われわれがすでに見聞し、体験してきた事物の表象については全く明確なる実在性をもつが、新しき計画は単に表象せられたものの表象に過ぎない。」⁽⁶⁾ そこで事の成果はすべ

て、『洞察』の如何にかかるのである。すなわちそれは「事物が未だ基礎づけられていない瞬間にすら猶ほ能く後日の経験が確認するが如き仕方に於てこれを見るところの能力、或いは人が拠って以て行動すべき根本原則に就て何等の成算をも持ち得ない場合に於てすら、否、正に斯かる場合に於てこそ、本質的なものを確実に把握し非本質的なものを全く除外するが如き仕方に於て之れを見るところの能力の如何にかかるとのである。徹底的な準備工作と事実知識、知的理解の広さ、論理的分析の才能さへも場合によっては失敗の源泉となることもあるであろう。吾々が自然界並びに社会的環境を正確に知れば知るほど、また事実に対する吾々の支配が完全になればなるほど、時間の経過や合理化の進展に伴って事物が簡単に計量せられ、しかも迅速且つ明確に計算され得る範囲が大となればなるほど、正にこの能力の重要性は益々後退し、従って『企業者』タイプの重要性も低下して行かねばならぬ。」⁽⁷⁾かくして指導者の能力は、シュムペーター流にいうならば、経験をベースとするところの『洞察』に依拠しているのである。彼の主張するその『洞察』とは、人間が行動すべき根本原則について何等の成算をも持ち得ない場合においてすら、否、正にかような場合においてこそ、本質的なものを確実に把握し、非本質的なものを全く除外するかのような仕方においてこれを見るところの能力にかかわるものである。さてこのような経済主体の能力にかかわって、その主体の態度が問われなければならない。これが第二の論点となる。なぜならば、新らしきことを為すのは慣行的なものや、試験済みのことを為すよりも常に、実際に困難であり且ついささか趣を異にしているのみではない、また経済主体は新らしきものに反対するものであって、仮令事実上の困難が存在しない場合にも尚ほ之れに反対するであろう」⁽⁸⁾からである。このことはすべての領域においてそうである。しかしいま、経済活動の世界においてこれをみるならば、「新たなものを為さんとする者自らの胸中に於てす

ら慣行軌道の諸要素が浮び来たって、成立しつつかある計画に反対するが如き証拠を列べるのである。意志を新たに働かし又はその方向を変えることは次の如き事情によって必要となる、即ち日常の仕事と配慮との中に既に含まれているものに加うるに新結合の腹案と完成とに要する余地と時間を搾り出すこと、或いは又この結合に於て単なる夢や遊戯ではなくてその実際の可能性を見ることに努めること之れである。斯くの如き精神的自由は単なる日常の必要以上に大なる力の過剰を前提とする、夫れはいささか独特なものであり且つその性質上稀有のものである」(傍点は浜崎)からである。いわば、新しい何もかをなそうとする者の胸中に、慣行軌道の諸要素は浮び出で、成立しつつかある計画(embryonic project)に対して反対する証拠(witness)となつてたちあらわれるのである。それ故に、(i)日常の仕事と配慮との中にすでに含まれているものに加えるに新結合の腹案(conceiving)と完成とに要する余地と時間を搾り出すこと。(ii)新結合を実際の可能性として見ることに努力すること、以上二つの態度が意志変革のベースにすえられてくるのである。

以上のような経済主体の態度にかかわる論点に対して、最後に、いわゆる社会環境の反抗の問題をめぐる問題がある。換言すれば、一般的にあるいは特に経済的に新たなものをなそうと欲するすべての人々に対してむけられる社会環境の反抗についての問題である。シュムペーター自身は、この反抗は、まず第一に「法律的又は政治的妨害物の存在として現われ得る」と指摘し、続いて「社会的協同体の一成員が他と異なる態度をとることは悉く批判的となる」⁽¹⁰⁾という。それにしてもこの抵抗を克服することこそ常に生活の慣行軌道には存在しない所の特別の種類の課題であり、しかもそれは、特別の種類の行動を必要とするところの課題なのである。ところでそうした経緯を、経済的事物の場合においてみるならば、抵抗はシュムペーターによれば、「まづ最初に新たなるもの

によって脅かされる集団から始められ、次には一般世人の側から必要なる協力を得ることの困難のうちに現われ、最後には消費者を自己に惹きつけることの困難に現われてくる⁽¹¹⁾のである。そのような抵抗を克服する課題、そしてその課題を正しき可能性に対して、しかも、もっぱら新しき可能性に対しての対応においてのみ、成立しうると理解するのがシュムペーターの指導者課題の性格であり、裏がえしていえば、主体的には指導者タイプの成立であるということになる。

さて、以上経済的に新たなものをなそうと欲する経済主体の能力・態度ならびにその行動に対する社会的反抗の諸局面をみてきた。問題は、こうした三つの局面から把握される指導者の課題と、その活動が、企業者職能とどのように関連するかということである。シュムペーターの論理からすれば、企業者職能なるものが私的『実業家』の事柄である限りは、それは経済生活を客体とし、あらゆる種類の指導を包括しているものではない。各種の労働者指導者や利益代表者の如きもまた——単に経済政策の領域においてのみならず——経済的指導者たり得るのである。ところが経済生活における私的指導者の中で特に『企業者的』種類のものは、——その行動からもまたそのタイプからも——それらに特別な諸条件によって色彩づけられ形成されているのである。それ故にこそ、ここでその行動なりタイプなりを特徴づけている動機の問題が、基底にたちかえて明確にされる必要がある。シュムペーターは、まず循環における経済的動機から論議を始める。すなわち、それに対しては、明確なる意味が与え得るとして、こういふのである。「特に経済行為の根本的意味すなわち何故に経済行為一般が存在するかの意味は、循環において現われている。この意味においては、経済的動機の内容としての財貨獲得は勿論欲望充足のための財貨獲得に外ならない。若しこの動機の強さが文化や主体の社会的位置の如何によって特質的に異り

且つ常に社会的に与へられるものであることや、更に單純に個々の個人の欲望に関するのみではなくして各主体が配慮をめぐらす他人の夫れにも常に関連するものなること——即ち之れは充足さるべき欲求が決して個人的なものでないとか、或ひはまた個人的であるとしても夫れは他人の欲望満足をも配慮する欲望をも含むものであるとかの孰れかの形で表現せられる——等が顧みられるならば、然らば即ち均衡への努力の諸過程はその標準と法則とを、消費行為から期待される欲望満足の領域に於て発見すると、安んじて云ふことが出来る。すなわち吾々は前者を後者から意味解明的に理解し得るのである⁽¹²⁾と。このように『一定条件に制約せられたる経済の循環』のもとでの行為の経済的動機をおさえた上で、シュムペーターは、企業者タイプに関しては、ここにしめされる動機と、同様の意味において語ることが得ないと注意を惹くのである。すなわち、たとえ企業者の動機が利己的——或いは『高度化された利己主義』の意味においても——に色づけられているとしてもそれは全く特殊なものである⁽¹³⁾と考えるからである。その考えはどこから生じてくるか。それは、まさに「企業者」概念に対するシュムペーターの内容規定にもとづく⁽¹⁴⁾。すなわちそれは、(イ)特に何等の伝統および係累を有せず、しかもあらゆる束縛を打破する真の楨杆である。(ロ)自己が生れたり、あるいは昇りゆくところの社会層の超個人的価値体系に対して全く無縁のものである。(ハ)近代的人間、個人を基とする資本主義的生活様式、無趣味な思考様式、功利的哲学の先駆者である。(ニ)単に意識的に構成せられた行動という意味での合理的行動をとるものである。(ホ)私経済的に有利な方向に向けて経済生活を改組する動輪である。このように性格づけした上で、ではその性格の基底に横たわる行動動機が何であるかを明かにする。第一に、私的帝国 (private kingdom) を、また必ずしも必然的ではないが多くの場合に自己の王朝 (dynasty) を建立せんとする夢想と意志であり。第二は、勝利者意志である。すな

わち一方に闘争の意欲、他方に成功そのものための成功獲得意欲である。第三には、創造の喜びである。すなわち一方では行為そのものの喜びであり、他方においては、特に労作、新創造そのものに対する歓喜である。⁽¹⁵⁾

(それがそれ自体独立せる喜びたると、行動に対する喜びと不可分のものたるとは問うところではない) さて、以上三系列の動機のうち第一の動機においてのみ、企業者活動の成果に対する私有財産が企業者の活動のための本質的要因となるのである。ところが他の二つの動機は、そのことよりもむしろ他の特種に精密であり、しかも他人の判断から独立しているようなもの、すなわち資本主義的生活においては、勝利と成功とが測定せられ、その創造者を喜ばす仕事を成立せしめ、これを継続せしめる様な種類のものなのである。⁽¹⁶⁾

以上、われわれはシュムペーターの主張する企業者動機がなんであるかをみてきた。そこで明かになったことは、まず企業者タイプをめぐる性格づけが、きわめて論理的であることはもとより、その多面性を彼の主張する『洞察』をもって、統一的におさえているということである。しかも、その企業者タイプの基底に存する動機に関しては、ウオリッチ氏流に、簡単にかたづけ得ない論点が横たわっていることを確認することができたのである。さてこのような検証過程をふんまえてみるならば、リムマー氏の第三の結論(第三章参照)の内容は、かなり首肯に値するといわなければならない。すなわち論理的推論としては、低開発国における統治機関を通じて作用する企業者性を考察する際には、第一次接近として、シュムペーター・モデルにおける企業者性と個人に要請される個性的特徴との両者を比較し、そこに対照点をえがきだすことよりも、類似性を強調することの方がずっと合理的であるといえるのではなからうか。リムマー氏はいう。「人間は抽象像で容易に動かされるものではない。したがって、公共的善のサービスが、企業者動機の最も重要なものであるとしたなら、革新は過去におい

て皆無に等しいものであったにちがいない。また将来とるにたらないほどの革新しか惹起しないといわなければならぬ。このことは、なにも革新者は、ぞんがいの物質的觀念の自己動機によって動かされる、ということを中心張るためではないのである。いかなる社会関係においても、成功的革新者を目じるしとするものは、うぬぼれた利己主義であり、自己中心であり、シュムペーターが主張するように、『見解の狭さであり、しかもしばしば無情さを見分けることができない一種の力』⁽¹⁷⁾である⁽¹⁸⁾。かくして私的機構を通じるかわりに、政府装置を通じて企業者エネルギーに出口を与えることは、さほど重要なことではない。何故ならば、政府活動は人間活動の他の諸形式と明確に区別することができうる特定の特性があるわけではない。というリムマー氏のいま一つの基本的な問題視角がえられるとともに、その視角から必然的につぎの帰結が導かれるのである。すなわち「企業者動機というものは、様々な制度を通じて活動に移される、そのいわば諸制度とともに変化するのではない。更に企業者動機は、政府装置による企業者性の指導が革新の仕方において（the *modus operandi*）シュムペーター理論と比較してみても重大な相違を意味するかどうか考察してみなければならぬ問題である」⁽¹⁹⁾と。しかしながら、われわれはこの問題提起に接近する一つの示唆を、シュムペーター自身にみいだすことが可能ではなからうか。というのは、彼が企業者の動機について論議した三系列のうちの第二（勝利者意志）、第三（創造の喜び）のものにかかわる所論の中に、その示唆を看取するからである。彼はこうのべている。「この種のものとは第二・第三の動機をさす」⁽²⁰⁾浜崎⁽²¹⁾他種の社会的処置によっては容易に置き替へられないが、併し之れを求むるのは毫も不合理ではない。私的企業者を排除する社会組織に於ても素よりその代替物が求められなければならないのみではなく、更に企業者が自己の利潤の大部を消費せずして蓄積する時に果すところの企業者の職能の代替物も亦見出されねばならぬで

あろう。これは實際問題としては確かに困難なことであらう。併し組織化の理念からは容易なことである⁽²⁰⁾。それゆえに、「経済生活において確認され得る無限に多様な動機に就て、或いは吾々のタイプの行動に対する動機の事実的重要性に就て、並びに他種の事情の下に於ける且つ恐らくは他種の刺激の下に於ける此等動機の保存の可能性に就て詳細なる現実的研究をなすことは、真面目に考慮さるべき『計画経済』並びに真面目に考慮さるべき社会主義の根本問題である」と。さてこの論述によって示唆されるものは、彼の主張する企業者動機が資本主義経済においてのみ考えられるのではなく、いわゆる計画経済体制、ならびに社会主義経済体制のもとにおいても考慮されるべき根本問題の一つであるということである。とするならば、ウオリッチ氏が積極的に提言する誘導発展下の経済形態を一種の「計画経済」と仮定するならば、まずそこにおいては、企業者動機を他種の社会的処置によってどう置き替えるかという問題が作業過程の一つとしてしかも根本的なものとして明かになされていなければならない。しかしながらすでに考察してきたように、ウオリッチ氏が構想している誘導発展の理論に対応する低開発国の经济社会は私的企業者が排除される社会組織としての「計画経済」をならん意味するものではなかったはずである。したがって、そこにおいては、経済過程は、基本的に革新過程としてとらえられるべき筋のものであるといわなければならない。

ところで、論理的筋としてそのように考えるときも、問題が、革新のやり方をめぐって生じることはいうまでもない。シュムペーターによれば、それは、現存している生産要素の利用ならびに結合から新しい生産機能にそれら生産要素を転用することに存しているのである。そしてこの目的のための金融は、銀行によって準備されるのである。したがって、ある時点で、群生する革新傾向を所与とすれば、(ある一つの革新は、他の革新の可能性

を高めるかもしれないが) 周期的インフレーション動向をひきおこすということがいえるのである。しかもこのインフレーション動向は、第二義的諸活動(物価騰貴動向によると考えられる)によって強められるということである。以上の推論を、現実的視角からつめてみれば、革新時期は、創造の苦悩の時期であり、新しいないしはより安価な財貨の流れの形態での収穫期は、革新に対する苦しい適応の期間であり、信用収縮に対するこれまた苦しい適応期間であるということになる。この現実的図式状況が、つぎのべるような場合に、根本的に変更可能かどうかを考察してみることが必要であろう。すなわち、革新が私的機構を通じて形成されるかわりに、政府部門や公法人(statutory corporations)を通じて形成される場合がそれである。この状況においては、まず金融される革新的プロジェクトの選択は、銀行の商業ベースによる決定のかわりに、政治ベースの決定によるものといわなければならない。したがって、金融は、信用創造とはちがった手段によって準備されることが可能と考えなければならない。他面、革新が政府部門や公法人を通じてなされるにせよ、それは明かに商業的冒険であるプロジェクト(基本的公共サービス、保険、教育等の投資計画と区別される)であることにはちがいはない。とすれば、それらプロジェクトが商業的規準と無関係に形成されるとは考えられない。しかも金融は現実の貯蓄にもづくものと考えすることはできないし、また財政収入の増大した余剰分から得られるものとも考えられない状況下では、インフレーション傾向は、国内銀行あるいは外国からの貸与の程度まで現出するとみなければならぬ。

そうしてまた、つぎの点も考慮にいれておくべきである。すなわち政府計画が主要な革新によって創造したところの新しい経済的諸条件に対する調整の問題である。ウオリッチ氏は、この点に關説して、つぎのようにのべていた。すなわちシュムペーター流の経済と比較される低開発国においては、「外国技術が依然として採用され

る状態にあるかぎりでは、投資機会の流れにおいて、一時的に小康状態の危機が存するとしても、それはごく小さなものである⁽²²⁾と。しかしながら、シュムペーターの循環の後退局面は、投資機会の一時的な排除によって引きおこるのではなくて、先行する革新に対する調整の必要性によって起るのであった。いわばいかなる社会においても、いやしくも急速である発展は、事実上明らかに矯正を必要とする構造上のゆがみを現出するのである。その矯正が多量の私的投資決定で具体化されようとも、あるいは政府計画委員会による、いわゆる「五カ年計画」の修正で具体化されようとも当然のこととしていえるのである。以上のように考察してみると、リムマー氏がH・S・ブチャナン氏(Normans S. Buchanan)とH・S・エリス氏(Howard S. Ellis)の主張、すなわち「私的企業者にかわって、政府の企業者性をおきかえることは、経済的性格ではなくて、発展担当の行政的形体を単に変更することである⁽²³⁾」という見解を支持してきている論拠も明白になりえたと考えられるのである。⁽²⁴⁾

- (1) D. Rimmer; op. cit., p. 429
- (2) H. W. Wallich; op. cit., p. 194
- (3) H. W. Wallich; Ibid., p. 194
- (4) D. Rimmer; Ibid., p. 429
- (5) J. A. Schumpeter; The Theory of Economic Development, Harvard University Press, 1934, pp. 74—94
- 中山伊知郎・東畑精一共訳(原著第三版より)『経済発展の理論』岩波書店二一九～二三三頁
- (6) J. A. Schumpeter; op. cit., p. 83 邦訳書二〇七—二一五頁
- (7) J. A. Schumpeter; Ibid., p. 84 邦訳書二〇七—二一〇頁
- (8)(9) J. A. Schumpeter; Ibid., p. 86 邦訳書二一〇—二一一頁
- (9)(11) J. A. Schumpeter; Ibid., p. 87 邦訳書二一一—二一二頁
- (12)(13) J. A. Schumpeter; Ibid., pp. 90—91 邦訳書二一二—二一四頁

- (14) J. A. Schumpeter; *Ibid.*, p. 92 邦訳書二二四—二二五頁
- (15)(19) J. A. Schumpeter; *Ibid.*, pp. 93—94 邦訳書二二—二三頁
- (17) J. A. Schumpeter; *The Instability of Capitalism*, *Economic Journal*, XXXVIII, 1928, 379n
- (18)(19) D. Rimmer; *op. cit.*, p. 431
- (20)(21) J. A. Schumpeter; *The Theory of Economic Development*, p. 94 邦訳書二二三頁
- (22) H. C. Wallich; *op. cit.*, p. 194
- (23) Normans S. Buchanan and Howard S. Ellis; *Approaches to Economic Development*, New York, Twentieth Century Fund, 1955, p. 82
- (24) D. Rimmer; *Ibid.*, p. 433

六 争点—その(Ⅲ)

——シュムペーター体系の「革新」概念の解釈をめぐって——

ところで、すでに第二章においてみてきたように、ウオリッチ氏の中心的主張点は、低開発国の開発方法にかわるものであった。すなわち「要求圧力」(“the pressure of need”)と「限界の拡大化」(“a widening of horizons”)との結合によって、「開発の進行」(“development drive”)は促進してきている、という彼の基本認識がそこにはあった。しかも彼の「限界の拡大化」の概念内容は、ヌルクセ氏の主張した国際的デモストレーション効果と結びつくものであったし、また植民地支配の終末とも結びつくものでもあった。しかも彼の場合、『限界の拡大化』過程は、革新に類似する何ものかを導くのである。しかしながら一度スタートしたその過程の継続は、シュムペーター・モデルとは、別の事柄なのである。これが低開発国における特徴の様相である。すなわち、その革新の過程は、同化作用の過程としておよそ記述されるのである。勿論発展に乏しい国において、新しい産業

を組織するということは、企業者の創意工夫の手腕であることは何人も否定しないはずである。しかしながら、それは革新の原型的創造過程 (the original process of innovation) とは、明かにちがったものなのである⁽¹⁾。ここにしめされるウオリッチ氏の開発方法をめぐる論議展開に対してリムマー氏は、その主張は全般的に理解しがたいものである、と批判し、つぎのようにいう。「同化作用されているものが何であるのか、という点がこの論述では明確になされていない。しかもウオリッチ氏は、やがては『現存している革新の同化作用』⁽²⁾について語っているが、そのことは、彼が革新によって、いったい何を理解しているか、という疑問を生じさせるのである。さらに、低開発国における新産業の機構が、明かに企業者活動であることは否定しがたいけれども、それにもかかわらず、『創造的』革新とはきわめてちがったものであるという彼の主張は、注目に値する困難な問題である。この主張には、およそつぎのような示唆が存するのである。すなわちかような活動は、革新ではないといわれてはなくて、いわばその活動の原型の国における問題の産業の創立よりも、ある意味において、革新のとほしさの問題であるというのがその示唆する内容である⁽³⁾。さてここに第三の争点が提起されている。すなわちシュムペーターの主張する革新概念をめぐる意見の相違である。ウオリッチ氏自身は、革新に対して、付している意味が何であるかを明かにしてはいない。おそらく彼の場合、シュムペーターによって形成されている革新の概念について五つの場合を周知の事として仮定しているのかもしれない。しかしながらリムマー氏は、ウオリッチ氏が革新で意味している事柄に付している唯一の表示は、「技術」(“techniques”)という用語を革新と同格に使用することによってであると批判の糸口をきる。ところでシンガー氏は、革新の問題にふれてつぎのようにのべている。すなわち、低開発国における経済発展は、「新しい技術の方法によっておしすすめられるのではなくて、今日、

発展を遂げている国々において、周知の古い確立した生産物の生産に対する古い確証ずみの技術の導入や採用を通じておしすすめられるのである⁽⁵⁾。つぎにボンネ氏の見解を紹介してみるとつぎのようである。シュムペーター・モデルにおいては、「経済過程は、革新による運動で大いに維持されるけれども」低開発国においては、「組織化された生産は、内生的革新に依拠するのではなくて、移転された技術によるものである」と⁽⁶⁾。そうしてさらにつぎのよう⁽⁷⁾にいう。「シュムペーター・モデルにおいては、革新の要素が基本的 (cardinal) である。ところが、低開発国における『誘導発展』においては、なんら新奇な技術は要求されないのである」と。このようにシンガー氏、ボンネ氏の見解をみくると、基本的にはウオリッチ氏が内含する革新概念と異なるものではなさそうである。ある意味では、シンガー氏にしてもボンネ氏にしても、ウオリッチ氏その概念内容をより鮮明にし、また敷衍しているとも考えられるのである。リムマー氏はいう。「彼等の主張は、新技術でもって、革新の同化作用をまぎれもなく強調しているのである。しかしながら、それらの主張は、ある一つの解釈ではおさまらない複数の解釈を許すものであるように思えるのである。すなわち、ボンネ氏の評言が示唆しているより強力な解釈は、つぎのようである。低開発国は新しい技術を展開するのではなくて、それにかわる既成の輸入技術を展開するのであるから、シュムペーターの意味する革新は、低開発国においては惹起しないという考えである。それに対して、シンガー氏の主張する比較的穏やかな解釈はこうである。シュムペーター・モデルにおいては、革新は、新技術の出現に基礎をおくものであるけれども、低開発国における革新は、すでに確立された技術の適用に依存する、というのである。さて、ボンネ氏の解釈は、革新の欠如を指摘しており、シンガー氏の解釈は、革新の出現を認めるが、しかしそれらの革新が原型的創造的なものではない、（ないしは純粹なものではない）ということ

を意味しており、またそれらの革新が二流（ないしは下等クラス）に属するものであることを意味している⁽⁸⁾と。そのように、リムマー氏は、ウオリッチ氏の解する革新概念の内容が、新技術のことであり、しかもシンガー氏、ボンネ氏の両者が、ウオリッチ流の解釈に基本的に立脚しているとしても、両者が低開発国の実践的問題との対応において、シュムペーター・モデルを適応する次元の問題にいたると、そこには前述のような解釈と評価の相違をしめしているというのである。

さて、われわれは、いま一度、シュムペーターのセンスでの革新規準にたしかえてみなければならない。彼は新結合の遂行としての経済発展を問題とした。そうしてつぎのように明言していた。「生産をするとは吾々の処分範囲に存在する諸物諸力を結合することである。生産物並びに生産方法の変更とは之等の諸物諸力の結合を変更することである。旧結合から漸次に小さき歩みを通じて連続的に適応しながら新結合に到達され得る限りに於ても、確かに変化又は場合によっては生長が存在するであろう。然し夫れは均衡考察の力の及ばぬ新現象でもなければ將又吾吾の意味する発展でもない。さうでない場合、即ち新結合がただ非連続的にのみ現れることが出来、また事実現れる限り、発展に特有なる現象が成立する。……斯くて吾吾の意味する発展の形態と内容とは新結合の遂行 (Durchsetzung neuer Kombinationen) という定義によって与へられる⁽⁹⁾」と。かくしてシュムペーターは、新結合の遂行すなわち革新概念に、五つの場合を含まして意味づけをしたのであった⁽¹⁰⁾。ここできわめて明白であることは、必然的に伴う生産技術の技術的新奇さということが、シュムペーターのセンスでの革新の規準ではないという点である。この点について、彼は『景気循環論』で、はっきりとつぎのように断言している。すなわち、「革新が学問上の新規性を含んでいるかどうかは全くどうでもよいことである⁽¹¹⁾」と。彼がこのように断

言する根拠はなぜか。それは、まさに革新が、経済的概念であるという点にある。したがって、技術的に理解すべきものではないということである。換言すれば、革新は、経済過程との関連において、経済的に理解されるものであって、技術的な知識や経験の貯えとの関連において理解されるべきではないという基本認識がベースとして横たわっているからである。

われわれは、以上、シュムペーターの主張する革新の概念にたちかえり、それが意味する内容と、彼の基本的認識とのかかわり合いを点検してきた。その点検を通じて主張しうることは、まずボンネ氏の論理構造が、シュムペーター・モデルと低開発国とを対峙関係に設定し、しかも前者は革新をベースとするもの、後者は移転された技術をベースとするもの、というシェーマ化によってとらえ、革新概念を、経済過程との関連で理解する視角をみうしなっているという点である。要は、たとえ移転された技術にしろ、それがもつ経済的過程とのかかわりこそがシュムペーター流の革新なのである。リムマー氏はこの点を別の角度から照射している。彼はこういっている。「革新とその他の経済活動との相違は、企業者活動と日常的な経営者の活動との相違である。それ故に、所与の生産技術を、革新を組成する当該国へ導入するかどうかの一つの検証は、企業者性が要求されるかどうか、あるいは、日常的な経営者の常例的な仕事をもつばら要求されるかどうかということである。すなわち、新な道が耕されねばならないか、あるいはふみならされた道に依然としてしたしむか、どうかということである。低開発国に導入される新産業ならびにサービスのほとんどが、たしかにこの意味合いにおいて、企業者の冒険である。それ故に、技術上の新奇さにかかわりなく、ないしは、必然的に伴う技術の新奇さの欠如にかかわらず革新とみなされるべきなのである」⁽¹²⁾と。ここにしめされる、リムマー氏流の解釈からすれば、ウォリッチ氏の場合、たし

かに企業者活動を認めている。しかしながらその活動は前述した如く、明らかに彼の場合には原型的創造的革新とはちがったものを考えているのである。そのかぎりでいいうることは、ウオリッチ氏は革新そのものを区別（彼の場合には、技術上の規準についての区別である、とおきかえることができるが）を設定しているとみななければならぬ。この区別の論理構成は、シンガー氏にそれなりに継承されているといえる。すなわち「新しい技術」の出現と、「既成」の技術の適用というその区別に、継承性をみいだすのである。ところで、リムマー氏は、この区別が偽りの区別であることを示唆するなにもないとしてつぎのようにいう。「シンガー氏が暗黙のうちに認識しているように、既成の技術が新しい環境のもとで、変更されうるということは稀である。ほとんどの場合、輸入品が使用される新奇な物質的、経済的、人間的諸条件に対して、『既成』技術の長期にわたる適用過程なのである。換言すれば『既成』の技術はただ単に出発点なのである。このことは低開発国が今日までに十分熟知せしめられている真相なのである。……なおさらに、『新しい』技術は、その創造者の精神からことごとく生じるといふのは稀であるというのが通常の常識である。それらの技術もまた技術上の知識の現存ストックに基礎をおくものといわれるし、現存する技術は、技術の出発点としてとりあげてきたともいわれるのである。かくして、『新しい』技術の出現と『既成』技術の適用との間には、いかなる明白な分類もなしえないのである⁽¹³⁾」。このように、リムマー氏はシンガー氏を批判しつつも、ただそこには、程度の相違があることは仮定されうるとして、こういうのである。すなわち「低開発国を形づくっている技術的進歩の歩み (strides) は、先進国においてとりあげられるそれと比較してみて、相対的に短いのである。しかしながら、このことはシュムペーター理論の低開発国に対する適応性という点をなんら減じるものでないということは明白である。そのことは、論議上、技術的

進歩の歩みが、シュムペーター流の革新と同一視せられると仮定した場合にでさえもいえるのである。何故ならば、シュムペーター体系における革新の分析的意味は、循環的流れの均衡ないしは経済の停滞状態の攪乱を意味するのである。革新を装う技術進歩の歩みが短かろうと長かろうと、また革新が相対的に容易であろうと、困難であろうと、より多く『原型的創造的革新』であるか、あるいはそうでないかという問題は、分析的にはとるにたらないことなのである。しかしながら実践的には、このことは重要なのである⁽¹⁴⁾と。さて、このように論証を進めてきたリムマー氏は、彼の帰結の一つすなわち、革新をめぐるウオリッチ氏提言とその提言を基本的には継承しつつも二つの解釈(ボンネ氏流のそれと、シンガー氏流のそれ)を展開する視角に対して痛烈な批判をあげるのである。彼はいう。「ウオリッチ氏の主張について、われわれがより烈しい解釈をとろうと(ボンネ氏の場合のように⁽¹⁵⁾浜崎)あるいは穏かな解釈をとろうと(シンガー氏のそれのように⁽¹⁶⁾浜崎)低開発国とシュムペーター・モデルとの間に彼が形成している著しい相違は幻想的なものにすぎない。なぜかといえば、ウオリッチ氏は、革新を経済学との関連において理解することなく、技術との関連において理解する根本的誤ちをおかしているからである」⁽¹⁷⁾と。

(1) H. C. Wallich: op. cit., p. 193

(2) リトマー氏が「ウオリッチ氏のこの方すなわち“the assimilation of existing innovation”という表現は、きわめてまずい使用方であって“the assimilation of what were once innovation”という表現の方がベターであるはずとコメントする。

(3) D. Rimmer: op. cit., p. 433

(4) J. A. Schumpeter: The Theory of Economic Development, p. 66 邦訳書一六七頁
シュムペーターはこの概念はつぎの五つの場合を含むという。

一 新しき、すなわち消費者の間には未だ充分に知られていない財貨あるいは新しき品質の財貨の製造。

二 新しき、すなわち当該産業部門において實際上未知な生産方法の導入。これはあえて科学的に新しき発見に基づくを要せず、また商品の商業的取扱いにおける新方法をも含む。

三 新販路の開拓、すなわち当該国の当該生産部門に従来未だ紹介されていなかった市場の開拓、ただしこの市場が既存のものたるを否とを問わぬ。

四 原料あるいは半製品の新しき獲得資源の占拠。この場合においても、この獲得資源が既に存在せるか否か……あるいはそれが始めて創り出されねばならぬか否かはあえて問うところではない。

五 新組織の達成、すなわち独占的地位（例えばトラスト化による）の形成またはある独占の破壊の如し。

(5) H. W. Singer; op. cit., pp. 19—20

(6) A. Bonne; op. cit., p. 10n

(7) A. Bonne; Ibid., p. 12

(8) D. Rimmer; op. cit., p. 435

(9) J. A. Schumpeter; op. cit., pp. 65—66 邦訳書一六六一—一六七頁

(11) J. A. Schumpeter; Business Cycles, Vol. I p. 84 邦訳書第一卷、一二二頁 シュムペーターは、ここで革新という言葉で呼びうる事例として、商品の生産についての技術上の変化、新市場や新供給源泉の開拓、作業のテラー組織化、材料処理の改良、百貨店のような新事業組織の設立をあげている、そうして、この概念は、発明とは同義語ではないことに注意すべきであった、発明という言葉がなを意味しようとも、われわれの問題にとつては遠い関係しかもっておらず、その上、それは誤りにみちびく連想をもっていると警告する。

(12) D. Rimmer; op. cit., p. 436

(13) D. Rimmer; Ibid., p. 437

七 結 び

——論争検討の一階梯として——

私は本稿において、シュムペーターの発展理論モデルが、今日低開発国の開発理論形成との関連でいかに再検討・再評価が試みられてきているかを考察してきた。周知の如く、シュムペーターの理論の統一体系は、科学とイデオロギー、そして純粹認識と価値観とをどこまでも峻別する基本姿勢に貫かれ、彼特有の経済学方法論に裏うちされているのである。したがって彼独特の強烈なレトリックとも思える主張も、そうして一見逆説的とも思える論理構成も、すべて純粹認識と価値観の峻別に基く想源から形成されてきているといえる。たとえば、彼が資本主義についての本質的事実としてとらえたものが、「創造的破壊」(creative destruction, 『経済発展の理論』ならびに『景気循環論』における「新結合」new combination 「革新」innovation 概念)の過程であり、その認識から「靜態的な資本主義を語ることは、すでに言葉の上でも自己矛盾であり、動態的であってはじめて資本主義は存在しうる」⁽¹⁾のである、という彼の資本主義本質論、その本質論から帰結する資本主義の運命論(「その成功によって資本主義は滅びてゆく」)が何よりもわれわれに強く訴えるところである。

さて、そのような統一的体系をもつシュムペーター学説を支えている「科学論」自体が現時点においてどのよう¹⁾に方法論上評価されるべきであるかは考察を深めてみるべき問題であろう。しかしながらそうした根本的反省も帰するところは、現実の實踐的問題状況との対応の中ですすめられることにおいて始めて実り多い示唆をそこにみいだすことになるのである。

こうした問題意識からするならば、今日の低開発国問題にかかわってシュムペーターの発展モデルに照射し、そのモデルの適用、不適用をめぐる検討を試みてきたウオリッチ氏の視角設定は、それなりに高く評価されなければならぬ。しかしながら、二章で考察してきたように、彼自身の関心事がいわゆる誘導発展の理論の構築という点におかれ、そのことに急なあまり、シュムペーター理論の統一的体系、なかならずその軸芯である発展モデルについての検証作業の弱さを暴露している点はいなめない。その端的な一例が「革新」概念をめぐる解釈にみられる。すなわち彼はそれを、技術上の革新のみに限定してとらえ——しかも経済的意味連関を欠落して——広く革新全体として位置づけえなかった点に如実にあらわれていた。そのことは、低開発国における消費者嗜好をめぐる叙述にもうかがうことができる。周知の如く、シュムペーターの発展モデルにおいては、消費者の嗜好は、革新的生産者の活動によって形づくられるものであって、その反対ではない。それ故にもし、低開発国における発展の諸活動が外国（先進国）の影響のもとでつくられた嗜好の変化によって一般に支配されるといふことが明らかにされうるならば、シュムペーター理論を低開発国に適合さすといふことは、失敗であると主張することはそれなりに根拠をもつ。事実シュムペーターはつぎのように主張している。「嗜好の変化は、消費者の発意から規則的に体系的に、この発意が経済発展の主要な原動力の一つを構成するといふような風に起るのだと考えるものがあるとすれば、論理的にわれわれの分析図式の有効性を否定しなければならぬであろう」と。この叙述をふんまえていうならば、低開発国においては、消費者の嗜好の変化が、事実上自律的性格をもっているかどうかという点に帰着する。この問題に関して、シンガー氏は説明の根拠を、先進国の生活水準によるデモストレーション効果の中にみいだそうとする。しかしながらそのことには別の問題が存する。なぜならば、そもそも

デモストレーション効果概念が消費者個々の選択の相互依存の理論における概念であつて総体としての消費者選択の理論的概念ではないからである。その点の吟味はさしおくとしても、結果的には、消費者欲求は、生産者によって創造される、というシュムペーターの命題と矛盾するものであることはもとより、低開発国において消費者の嗜好の変化が事実上自律的性格をもっていることを論証したことにはならないのではないか。

そのように、ウオリッチ氏はシュムペーター・モデルを、開発論に適応可能か否かの検証過程において、多くの問題点を残しつつも、彼が主張する誘導発展の基本テーゼは、シンガー氏ならびにボンネ氏に継承されてきたといえる。ある意味では、（リムマー氏流の解釈でいうならば）両者のその継承の型は相違しているかもしれない。しかしながら彼等によつてウオリッチ氏の意図はより鮮明になったといふことはできる。

さて、シュムペーター・モデルをば、実践的な開発課題へ適応不可能と解し、有効な分析ツールとはなりえないと評価するウオリッチ氏、シンガー氏、ボンネ氏の論陣に対して、そのモデルがそのまま今日の低開発国の経済開発の問題に適応可能とは評価しえないにしても、いわば一定の理論的限定をそこにみいだしながらも、（第三章参照）そのモデルの適応可能性を強力に主張することによつて、上述の論陣に反論を展開するリムマー氏の所論を考察してきた。その際に両陣営の争点を三点にしぼつて検討を深めてきた。それぞれの争点の論議展開において明かにしてきたように、私自身は、リムマー氏の論陣に近い立場をとる。私は、リムマー氏の見解をつぎの二つの点からうけとめる。すなわちその一点は、すでに指摘してきた如く、シュムペーター・モデルをめぐつてかつてマルクセ氏がいみじくも示唆した意味での——すなわちそのモデルが低開発国の経済開発問題に対する解決のための理論的雛型を提供するものであるという——一定の理論的方向性をもつた再検討の契機となつ

ているのではないかという点である。第二点は、——リムマー氏はこの点について十分な論議を展開しているとは考えられないが——シュムペーター・モデルを、機能分析の技術としてのツールとしてのみとらえることなく、低開発国の社会状態の基本特徴についてのビジョン、すなわち本質論にかかわらしめて、そこに、そのモデルの理論的限定をみいだしている姿勢が横たわっている点である。

しかしながら、そのモデルを低開発国の開発課題へ適応の可能性を論証しようとするためには、リムマー氏は、残された問題があることを知らねばならない。その一つが独占の問題である。シュムペーターの理論は、もともと独占の要素が中心的な地位を占めている。すなわち彼が主張する革新は、何らかの意味で企業者に独占的地位を与えるからこそ、資本主義経済を發展させるのである。これが彼の基本的考えであるといえる。革新企業者は一時的にせよ、他の一般企業者より有利な生産条件を独占するからこそ、利潤を獲得するのであり、そしてこの利潤こそ企業者に革新を行なわせる原動力ともなるのである。この論理が今日の低開発国において直ちに考えられうるかどうか。まして国際経済場裡を視角に入れてくるならば、たとえ低開発国自体から内生する右のような経済論理が創造されるとしても、先進国の大企業独占によって、結果的には、競争の排除、進歩の全面普及の障害となつてゆくのではないか。

よもや、リムマー氏は理論的にも実践的にも「資本主義の成功が企業者のネメシス nemesis になつてしまふ」そのような経済体制を低開発国に考えているとも思えない。とするならば、シュムペーターが企業者活動の動機をめぐつていわゆる「計画経済」ならびに「社会主義」のもとで考えられるその態様について示唆を与えた意味をいま一度反省してみるべきではなからうか。

- (1) J. A. Schumpeter; "Capitalism", 1946, Encyclopaedia Britannica Vol. IV, 801—809 の Schumpeter の説に對する Clemence の論議に對し "Essays of J. A. Schumpeter" の巻頭論文に對して論議せられたる。
- (2) J. A. Schumpeter; "Business Cycles", Vol. I, p. 74 中田眞三監修金澤経済研究所訳『景気循環』第一分冊 106頁
- (3) James R. Schlesinger and Almarin Philips; "The Ebb Tide of Capitalism?" Schumpeter's Prophecy Re-Examined, The Quarterly Journal of Economics, Vol. LXXIII, No. 3 August 1959 pp. 448—465